
IS = 誰がための銃痕 =

水屋の娘は美しい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS「誰がための銃痕」

【Nコード】

N4361V

【作者名】

水屋の娘は美しい

【あらすじ】

唐突で悪いんだが、アンタは女の子がゴミ捨て場（今日のゴミは普通ゴミ＝生ゴミあり）に背中から落ちてゆく光景を想像できるか？ 今の俺なら多分、出来る。と言うよりも、現に目の前でゴミの上にグツタリと座り込んでいる女の子が居る。最近ちらほら見え始めた『亡国機業』側の主人公をオリ主に据えた物語です。処女作につき、文脈に不自然な点あり＝文才はない。さらにオリジナル設定多数に付き、人を選ぶ可能性大。そして、流血……。感想にはできるだけ早く答えたいと思ってます。アドバイスとか脱字とかよろ

しくお願いします。ちなみに、全く持つてヒロインとか決まってる。感想バツチ来いやアアアアアアアッ！！ ホームランで返したるけん！

唐突で悪いのだが、アンタはゴミ捨て場（今日のゴミは生ゴミ）へ女の子が背中からダイブする想像が出来るか？

俺は多分、出来る。

昨日から雪がチラつくこの寒空の下。地面は中途半端に雪が降ったせいでビチャビチャになって、その冷たい雪解け泥水が、昨日の夜防水スプレーをかけて防水対策は万全かと思われていた靴をジワジワと浸透していく、正直言ってあまり外に出たくないこの日。

俺は今日、それこそジ。リ映画の『天。の城』に出てくる大佐もビックリな速度で、生ゴミが腐っていやな臭いを放つゴミ捨て場に落ちた女の子を見た。

正確には、髪は黒で、見た目からわかるほどにがさつそうで、できれば関わり合いにはなりたくないオーラを出しながら、それと同じぐらいに腕と脇腹から血を流している、今にも死にそうに過呼吸で酸素を補給している女の子だった。

「おいおい、勘弁してくれ。これで今月、何人目だと思ってるんだ……」

月が開けて一週間もしないうちに、地面に転がっていたり、後ろの壁を血まみれにしながら腰を落ち着けてたり。今日は今日で、見た感じ堅気じゃない女の子がゴミ捨て場にダイブ。全く、治安が悪いこと悪いこと。

そうこうしているうちに、頭上から人が何人が走る足音が響く。
まあ、この展開から察するに――

「見つけたぞ！ こっちだ！」

「あの女あ！ ぜってえにぶつ殺してやる！」

大人が持つていてもあまり感心できたものではない、黒光りする鉄の塊の、俗に銃口と呼ばれている穴がこちらを向く。

「ま、待て撃つなっ！」

俺と視線が合った男の一人が、銃口を空に持ち上げて周囲に停止命令を出す。

「なんだっ！ あの女は虫の息で目の前に……な、お前は！？」

「こんな昼間っから、トリガーハッピーしちゃって。何かいいことでもあったのか？」

俺の存在を確認した男達は、引き金から指を放して俺を注視する。

「亡霊……。なんでお前がここで出てくるんだ……」
ファントム

「俺がどこに居ようと、アンタには関係ないだろ。と言うか、こんな大勢で女の子一人に何やってんだ？」

「黙れ、猟犬！ 他組織の貴様に言う義理は無いつ！」

まあ、確かにそうだな。他の組織の人間に、自分達の行動を態々

言う必要性と利益性は皆無だ。

「お前、この女とはどんな関係だ？」

そう言って一人が、銃口でゴミの山で寝てる少女を指す。

「ああ？ 俺とこの女の関係？ 赤の他人だ」

「そうか」

そう言ってH&a m p ; K M P 7と言う、毎分九百五十発の弾丸を吐き出す短機関銃を少女へと向ける。と言うか、装備良いな。それ、最近出来たばかりでまだウチラも仕入れてないのに。

「アンタら、随分といい武器もってるんだな。どうした？」

「それを言う必要性は——なっ！？ ガキがいねえ！」

「何だと！？」

確かに、さっきまでゴミ捨て場でぶっ倒れてた少女が居ない。

「あああつ、クソツ！ 探せ！ まだそう遠くには行ってないはずだ！」

そう言って他二人は何処かへと向かう。

「いやあ、随分と災難だったな。女の子に逃げられて。まあ、俺には関係ないけど」

「ふざけるな！ お前と喋っていたから逃がしたんだ！ ただで逃げられると思うなよ」

そう言つて銃口が俺に向けられる。おいおい勘弁してくれよ。俺はこれから昼飯食うんだから。

血生臭いことした後にはメシなんて食いたくないぜ。

「そりゃあ逆恨みつてもんだぜ。むしろ、俺にばかり意識が向いてるアンタらが悪いだろうが。自業自得だ」

「ざけんなあ！！！！」

——パァン！

一発の乾いた破裂音が響く。

しかしそれは、向こうが持つ短機関銃からでも、ましてや俺が銃を抜いて引き金を引いたわけではない。

「ほお……中々やるな」

まるで地獄から這い出てきたゾンビの手みたいに、銃を持った右手がゴミの山の中から顔を出してる。どうやら、男達に気付かれないうちにゴミの中に隠れて機を窺っていたらしい。

いきなりの手を打ちぬかれて驚きを隠せずに手を押さえる上にいる男は、どこからの攻撃かと、周囲を見渡し、そしてそれが下からの攻撃だとわかるともう片方の手で銃を持って下に銃口を向ける。

しかし、男が引き金を引くよりも前に、パン！ とまた一発だけ、乾いた破裂音が響く。

馬鹿な男だ。手と銃だけを出して下を掃射すれば良いモノを、わざわざ顔まで出すから額を打ち抜かれるんだ。そして男は体のバランスのまま、十五メートル近い場所からゴミ捨て場に真っ逆さまに落ちた。

うわっ！ いまさら空から脳漿まじりの血が降って来やがった！
ああゝあつ。食欲無くした……。

「ハーツ！ ハーツ！ ハーツ！ ハーツ！ ざまあ……みる……」

微かに聞こえる荒い息遣い。どうやら少女は生きているようだ。
まあ、虫の息ではあるが。

……はて、自動式拳銃で正確に相手の手と眉間を打てる人間を、
虫の息と言っていていいのだろうか？

「おい、生きてるか？」

取り合えず、生存確認。

まるで死んだ魚のような目で、俺の姿を虚ろ気に見てきた。いちお生きてるらしい。随分と生命力が強いこと。場所も場所なせいかゴキブリを連想してしまった。

だが、その目は偶然にも俺の方を向いていただけらしく、すぐにガクツと顔が下を向く。

「……おい生きてるか？」

「……」

試しにもう一度声をかけるが返事がない。ただの屍のようだ。

この場面で言うと冗談に聞こえないな……。

「仕方がない。地面に埋めるだけ埋めてやるか」

生ゴミ捨て場の中で漬物になりながら白骨化するのも可哀想だからな。

あゝあつ、これで俺は死体遺棄にまで手を出すのか。何か複雑な気分だ。別に俺が殺したわけじゃないのに。

取り合えず俺は、手に持っていた昼飯を地面において、彼女を引き摺りながらゴミ捨て場から出してやる。いやあ、臭い。臭すぎる。こいつは、帰ったら即行でシャワーだな。

「……仏さんの顔でも拝んでおくか」

どこの誰だかは知らないが、顔ぐらい拝んでから埋めないと化けて出てきそうだったので、俺は少女を仰向けに寝かせる。いや別に経は読まないよ。読めないから。

彼女が握っていた銃を取って、胸の前で手を重ねさせる。

黒い髪に白魚の様に白くて美しい肌。歳は十五か十六ぐらい。本当だったら地元のハイスクールに通って、笑っているはずであった

年齢だ。

さすがに同情を禁じえない。何が原因でこんな腐った世界と関わりを持ったのかは知らないが、次生まれてくるときはもつといい所に生まれてくるんだな。楽しい人生を過ごすことを祈ってる。

合掌。

「さて、埋めに行くか」

彼女を肩に担いで、パンの入った紙袋を手にとって歩き出す。…
…と言うか、ベルト多くないか、この娘の服。

「いやホント、可哀想だな……」

心の底からそう思う。

それと同時に明日は我が身なのだろうか、と思ってしまう。彼女みたいに体に穴が空いて、そこから血を流しながら死んでいくのか、あの男みたいに頭をぶち抜かれて一撃で死ぬのか。出来れば後者を希望する。

「……っ——」

今、首が動いたような……。

「いや、まさかな……」

死んでこんなすぐに動き出すとか、どこのバイオハザードだ。

そう思い、視線を横で力なく垂れている彼女へと向けた。

「……」

「……」

目が合った。まだ少し虚ろな目が俺を見てる。

どうやら、彼女は生きていたらしい。

脇腹と腕に風穴が開いて、その傷でゴミ捨て場のゴミに潜って、それでも生きている。

まるでゴキブリ並みの生命力だなとは言わない。少女をゴキブリに例えるという失礼なこととは思っても口に出さない。

「……って、こんなことしてる場合じゃないっ！……！」

俺は踵を返して全力で自宅へと走った。

1 - 1 (後書き)

この度は、この二次創作を読んでいただきありがとうございます。
この二次創作は自分にとっての初めての作品、つまるところの処女作でございます。

おそらくいろいろと至らないところがあると思いますので、その辺は感想で言っていただければ直す努力をしますので、どんどん言うて下さい。

自分の貴重な読者様のご意見が聞きたいので。

今後とも『IS』誰がための銃痕』をよろしくお願いします。

「まいどあり」

俺はいきつけのパン屋でB L Tサンドを四人前買って、店を後にする。

なぜ四人分かと言うと、俺が二人前、彼女が恐らく二人前食べるだろうと安易な予想の元、買ったのである。

彼女——ガラの悪いお兄さん達に追われていた所を、何の因果か俺が拾った黒髪の少女のことだ。

腕と脇腹に一発ずつ。弾は貫通していた。が、結構な大穴が開いていた。正直、よく出血多量で死ななかったモノだと今でも思う。

恐らくは、手元にあった不認可の日本製医療用ナノマシンを投与したおかげだろう。一本五万円とかなりの安値で売られていたから買ったものだ。純正品は高すぎるからな。さすがはISを作った人間を生み出した日本製のナノマシン。不認可とは言え他の国とは性能が段違いだ。だが、なぜに円なのだろう？ 持ってたから良かったものを。

ちなみに彼女は九死に一生を得て、今は俺の家で一昨日から寝っぱなし。

今日も相変わらず空は今にも泣きそうな鉛色をして、ゴロゴロと雷の低いうなり声まで聞こえた。正直、泣きたいのはこっちだ。今

日は休暇だと言うのに、急な仕事とかですぐに事務所に来いと来た。

全く持って人使いが荒い。腕時計を見ると正午少し前。昼ごはんを食べたらすぐに家を出なくては事務所に間に合わないな。

金さえもらえればどんな代物だろうが構わずに運ぶ『B・B運輸』。と言うのが、俺の職場。まあ職場と言ってもサラリーマンみたいなPCの前に座って資料を作ったり、上司にヘコヘコ頭を下げるような所ではない。食べるためにはたまに法に触れることもする、言ってみれば違法運輸組織だ。違法運輸が職業と言うのも案外乙なもので、自由に不自由しないのがいい所。

とは言っても、こうやって休日にも呼び出されることがあるから少し残念。だが、そう言う時は必ず大金が絡む仕事になっているから、むしろやる気が出てくるのだ。文字どおり、俺は現金なヤツ。

「たっただいまあ」

帰り道の途中で降り出した雨。俺は走って家まで帰って来た。

ベッドと冷蔵庫とクローゼット、それに写真立てしかない殺風景な部屋が俺を向かえる。俺が少年時代から住んでいるアパートだ。前は年上の同居人が居たんだが、今は代わりに二日前に拾った少女がベッドの上で寝ている。

「……まだ、寝てるのか」

まるで死んでいるかのように微動だにしない黒髪の少女。きめ細かい肌。整った容姿は凜としていて、だけどどこか穏やかとしていて、たぶん彼女は、笑ったら可愛いと思う。

まあ、その辺はどうでもいい。正直、彼女は俺の趣味ではないかな。

さて、問題はここからだ。俺は冷蔵庫からお茶を取り出して買って来たBLTサンドを食べ始める。

問題と言うのは、彼女の身元がまだにわからないと言うことだ。手がかりになるようなものを一切身につけていなかった。

まあ、彼女が目覚めた後に聞けば事は済むのだが、出来ることから親御さんに迎えに来てもらったほうが何かと良い。

なんせ、彼女は追われてるんだから。俺が行き会った追っ手の数は少なかったが、それでも短機関銃を装備した大人が三人。恐らく追っ手は三人だけではない。別動隊が居るはず。

それも計算に入れると、少女一人を殺すには過剰戦力すぎる。

それは裏を返せば、彼女が彼らにとって、表に出てはあまりよろしくない情報を持っているということだ。それが何かは知らないが。

.....。

背にしたベッドから視線を感じる。

「なあ、アンタ。起きてるんだったら起きてメシでも一緒に食わないか？ メシは一人でも多くの人間と食ったほうが美味しい」

「.....」

彼女は、今まで一度たりとも打たなかった寝返りを打って俺に背を向ける。どうやら、意識が戻ったらしい。

「下手な演技しないでいいから、一緒に食べようぜ。お前の分も買っ
て来てあるんだから」

「……」

だんまりか。かわいくないな。正直に腹が減ってるって言って起きてくればいいのに。

俺はそのまま動かない彼女の背中を見ながら食事を続ける。

「食わないなら俺がアンタの分まで食っちゃうけど、本当にいらないのか？」

袋から取り出したBLTサンド。分厚くきられた濃い味ベーコンに新鮮なレタスとトマトがマッチして、マヨネーズベースの特性ソースが いい 具合に三つの調和を取っていてこれが非常に美味い。あそここの店で一番売れている商品だ。

「はあーっ、じゃあBLTと飲み物は床の上に置いとくからな」

腕時計を見てみたらもうそろそろ家を出て事務所に行き始めないとギリギリだったので、俺は食べ物とコップ一杯分のお茶を床において家を出た。

イヤ全く、ホント、人間は飢えと恐怖には耐えられないとか誰かが言ってる居たが、嘘じゃないか。二日もまともに栄養とってない少

女が食べ物に釣られなかった。

いや、もしかしたら警戒していたのかもしれない、俺を。当たり前と言えば当たり前だ。見知らぬ人間の家に、見知らぬ人間と二人きりで、見知らぬ人間が用意した食事なんて食えない。俺はそうだ。

そう言う意味では身持ちの堅い少女のようだ。

S I D E ■ ■ ■

どうやらこの家主であるらしい、藍色の髪をした男が外へ出た。扉の鍵をかけた音がする。

その音を聞いた後、ベッドからゆっくり起き上がる。まだ体の節々が痛んだが、別に動くのに支障は無い。

男が言っていた通り、床には、少し大きめの茶色い紙袋とお茶の入ったコップが置かれていた。

それを見た途端、グ~~~~ツと少し大きく腹が鳴った。なぜこんなに大きく鳴ると自分の腹に苛立つが、あの男が出て行くまで持つてくれたことには感謝しなくてはいけない。

「.....」

紙袋の中を覗くと、そこには確かに美味そうなＢＬＴサンドが入っていた。恐らくは二人前。

あの男が用意してくれたのか？

そんな事を思いながら毒見のためにソースを少しだけ舐める。変な味はしない。

それを確認した後、ＢＬＴサンドにかぶりつく。ソースだけの毒見で、まだパンやベーコン、野菜の毒見をしていなかったが、まともな食事を長い間取らなかった彼女にとって、さっき舐めたソースの味が空腹の腹に響きそうさせた。久し振りに食べたまともな食事。

彼女自身、いつ以来かわからない。こんなに綺麗な食べ物を食べたのは。

いつの間にか二人前のＢＬＴサンドを完食していた。コップに入っていたお茶を飲んで一息吐く。

「それにしても、随分とおかしな部屋だ」

ホコリは落ちてない。家具も少ないが置いてある。なのに生活感を不思議と感じさせない、必要最小限と言うにはどこか違和感が残る部屋だ。

ふと、彼女の目に写真立てが映った。

「何かの集合写真か？」

とは言っても、顔がわかるのは二人だけ。でも、なぜそれが集合

写真と分かったかというと、顔こそは黒いペンで塗りつぶされているが、周りにも人が居たからだ。

写真には、まだ十歳にもなっていないさそうな藍色の髪の少年が一人。それと、澄んだ蒼空の様に蒼く長い髪を首の後ろで束ねている女性が一人映っていた。

二人はまるで姉弟の様に手を握って写真に写っている。

その姿は、彼女にあの姉弟の姿を思い出させた。

思い出されるのは憎しみ。それと嫉妬。自分に無いものを持っている人間に対するモノだ。

そして、彼女は胸元に手を当てる。

――が。

「……無い」

そこにあるはずの――彼女がいつも首にかけているロケットが無い。

ベッドの中にあるのかと思い見てみるが無い。

着ていた上着は、探したら玄関横にある台所奥にあるバスルームのかごに入っていた。そのポケットを漁るが無い。

「どついう事だ……」

逃げている途中に無くしたか？

だがその考えをすぐに捨てる。なぜなら落ちたのなら分かるはずだからだ。ポケットの中の定期を落とすのとは訳が違う。どんな時でも無くさないようにと首にかけたのだから落としたならすぐにわかるはず。

なら……どこに……。

「……あの時か」

所々で切れている記憶を遡って見た。

すると浮かんできたのは、あの男の顔。血を流し過ぎたせいか朦朧とする意識の中、少女が少年に担がれて頭が下を向いていた。

決まりだ。

完全にその時だ。

「クソッ」

近くにあつた洗濯機を思い切り蹴る。

助けてくれたことには感謝はしてる。だが！ 余計な手間を掛けさせるなっ！

だが、今から探しに行くことは、彼女にとってはリスクが高すぎた。探しに行こうにも、ここがどこだかわからなし、それに今気がついたのだが銃が無い。没収されたらしい。

追われている彼女にとって得物の一つもないのは心もとない。いくら身体能力が高いからと言って、銃対拳——遠距離対近距離では話にならない。背後を取ってナイフで一撃でしとめて相手の武器を奪う手も考えたが、まだ回復しきっていないこの体では、奪った後に殺されてそれまでだ。

死ぬ訳にはいかない。彼女には、死ぬ訳にはいかない、人一倍——否。人の何十倍何百倍何千倍の理由があった。ただ命が大切だからと言う理由だけじゃない。

自分が自分であるために。

自分が自分であるということを証明するために、彼女は行き続けないといけない。

どんな形であれ、生き恥を晒しても、無様に路頭を這い蹲ってでも生きなければいけなかった。

ビル郡の表のオモテのおもてを行った所にあるまっとうな会社がある場所を借りるような雑居ビル。最近建てられたそのビルの三階にある部屋。そこに事務所がある。部屋にあるのは、端に寄せられた椅子、向かい合ったソファとその間にある机、あとコーヒーマーカ―。一見すればどこにでもある仕事場。

一個だけ、不釣合いな所と理不尽な所を指摘できると言うのなら、俺が部屋に入った瞬間に彼女が手に持っている狙撃銃の銃剣の剣先が向けられたと言うことだ。

「おい――臃オボロ……」

今にも喉の皮を破って血が出るくらいギリギリの距離で銃剣を突きつける女。

鮮血を思わせる長い髪を後頭部で束ねている彼女の目は、笑い飛ばせないくらい殺気だっていた。

さすがの俺でもその異常な殺気に半歩後ろに下がる。

「な、なんだよ……」

「お前、冷蔵庫にあった最後のドーナツ食べただろ」

アンタ、最後のドーナツ食べられたくらいで人の喉元に銃剣を突きつけるなよ……。

「さあ、白状しろ。今大人しく言えば、懺悔する時間ぐらいはくれてやる」

「俺は死ぬことが決まっているのか！？　　と言っか、俺が食べたと言っ証拠は何だ！」

「ボンデリング」

ミスタードーナツの中で俺が一番好きなドーナツだ。

――って。

「最後に残ってたのがボンデリングだから犯人が俺だと」

「そうだ」

「証拠不十分すぎるだろうがっ！　　そもそも、俺がここに来たのは先週、日本での仕事が終わった後以来だ。つまり、俺がここにボンデリングがあつたことを知らないことになる」

と言っか、俺ってそんなに長い間、ここに来てなかったのか。いや、そうでもないか？

「いやわからんぞ。お前がこっそりここに来て食べたかもしれない」

「そんな面倒くさいことを誰がするか」

「……考えてみれば、確かにそうだな。お前、面倒な事が嫌いだからな」

やっと銃剣を収めてくれた。

できることなら殺気も抑えて欲しい。

俺の容疑は晴れていないようだ。

「それで、俺を呼んだ理由は？」

「そんなの仕事に決まっているだろう」

ですよね。

茜は狙撃銃を隣に立てかけてソファに腰掛ける。

俺も彼女に向かい合うようにソファに座る。

「今回は簡単だ。沈んだ船のサルベージ。正確には物資の回収だな」

「依頼主は？」

「うちのお得意さんだ」

と言うことはハヅキか。

「場所は太平洋の中心から少し外れた場所。とは言っても人間が潜っても問題ない深さと言っていたから、そこまで深くはないんだろうが、沈むまでの経緯に少々問題があつてな」

「問題？」

「漁船に見せかけた武装船だ。海賊だよ、海賊。海賊に襲われて沈んだんだと。まったく、日本の海上自衛隊の警備は成ってないよな。今時海賊なんて馬鹿な事やってる奴らを好き勝手にのさばらせて。警戒はザルもザルだし、見つけたら見つけたで攻撃するまでに時間をかけるし。まったく、成ってないよな」

まあ、そのおかげでこっちも動きやすいんだが、なんてことを茜は言う。

「ごもつともである。」

俺たちは主に海路を使うから、警備がザルの方が何かとやりやすい。

「回収する物資は——ほう」

なんて、さつきルキが持ってきてくれた紙ペラを手に、何か面白そうな、意味深長に目を細めて口元を歪める。彼女がこうやって笑っているときは大抵、よくないことを考えている。

「回収する物資は、ハヅキの新型ISのフレーム・装甲・重火器の三つだそうだ。いや、ずいぶんとすごい物を積んでたんだな」

と言うか、そんな物のサルベージをこっちに回すなよ、葉月社長……。

いくら経営主が旧知の人物だからって、これは明らかに、会社の汚点になるだろ。バレたら完璧に潰れるだろ、会社。

「取り合えず、海賊警戒のために、船は二隻。サルベージは、まあ、

物資だけ回収すればいいから、一隻で言いか」

「俺はどうすればいい？」

「お前は警備に回ってくれ。いざとなったとき、一番行動範囲が広いのはお前だからな。作戦開始は明後日の日付が変わるときがいいか。ちょうど天気もいい感じだし」

「了解。みんなには俺から伝えておく」

「ちょーっつと待て、臈」

俺が部屋を出ようとソファから腰を浮かせた瞬間、それを止めるように茜が俺たちの間にある机に身を乗り出して、俺の肩に手を置いた。

「なんだ？」

「実は、もう一つ話がある」

話し？ はて、何かあっただろうか？

取り合えず俺も茜もソファに座りなおす。

「しらばっくれても既に遅いから。お前、まーた子どもを拾ったらしいな。それも、厄介そうな子どもを」

「バレてた……？」

「バレバレだ、この戯け。厄介ごとを持ち込むのはお前の得意技だ

からな」

あまり自慢できない得意技だな。

まるで俺が疫病神みたいな言い方。

「昨日、ここに人が着てな、まあ十中八九、少女を追っていた組織に間違いあるまい。で、だ。向こうは少女の身柄引き渡しを要求してきたよ」

「却下だ」

俺が即答すると、

「言うと思った」

と、茜はあからさま過ぎるほど大きく肩を落とした。

「その日は取り合えず丁重にお帰り頂いたが、あれはまたくるぞ。そんな感じだった」

「じゃあ俺、とつとと家に帰りますんで」

「待て待て、面倒ごとを持ち込んでおいて、自分だけ被害を最小限にしようだなんて私が許すと思うのか？」

世の中、そんなに甘くない、と言うことか……。

「それでな、向こうは去り際にこんな事を言い残していったんだ。

——匿つようなら、戦争だ。

って」

そこで茜は大きく息を吸い込みながら天井を仰ぎ、顔が真上を向いたところで大きく溜息を吐いた。

ホント、溜息がよく似合う女だ。

「面白いとは思わないか、臍。——ウチラと戦争だってさ」

まあ、笑えない冗談ではあった。

脅しで言っているとしても、趣味が悪い。

本気で言っているのなら、相手は最近こっちの方まで縄張りを広げた新参組織か、向こう見ず無鉄砲無為無策の三流組織か。それが頭が完全にキマってるか、の三つだろう。

「別に、言うならタダだからいいけどさ、自分で言った言葉には責任を持たないと駄目だよな？」

子どもでも少し考えればわかる事だ。

自分の言葉に責任を持つ。

「タダほど高い買い物は無い、なんて言葉があるが、まさに、今回がいい例だとは思わないか？」

「茜……何をした」

その質問を待っていたとばかりに茜は、天井に向けていた顔をこちらに向け、楽しそうに笑う。

「臍、お前なら私の性格、知ってるだろう」

中途半端な事が大嫌い。

徹頭徹尾が彼女の基本方針。

と言うより、生きがい。

そして、何より――

「残虐で戦争の天才」

「よくわかってるじゃないか」

そう言ったのと同時に、どこかで爆発音が響いた。

――気がした。

「茜さん……」

給湯室からルキが姿を現す。

「A分隊からの報告です。目標への強襲成功。事務所の一つを爆破したそうです」

どうやら、俺が聞いたのは本当に爆発音だったらしい。

ルキの報告を受けて茜は、

「そうか、下がっていい」

と、満足気でも無ければ不快気でも無く、ただそう言った。

やはりな、と俺は思った。

彼女が鬱陶しそうに溜息を吐いたときから薄々感じてはいたが、やはり始めていた。

「アンタ、明後日には仕事を始めるのに、何やらかしてるんだ」

「別に。明後日の仕事は変更無く開始するさ。そこまで規模も大きくないみたいだから、事務所の二、三も潰したら手打ちにする。戦は早くはじめ、早くケリを着ける——だ、臆」

ケリ、着けるのかよ……。

「勿論だが、お前にも動いてもらうからな」

わかってましたよ。わかってはいましたよ。俺も強制的に参加させられるのは。

火を見るより明らかだった。はい、認めましょう。

そして、明後日のサルベージ作戦も日程に変更はありえないと言

うことも、彼女の性格を考えれば簡単に察することができましよう。

だが、まあ、かなり面倒な話しではある。事務所を見つけて強襲。

場所がわかっていれば簡単ではあるが、そこにいたるまでが面倒だ。

だが、俺の考えを見越していたように茜は、至極まじめな表情を浮かべて俺の名前を呼んだ。

「臆。考えても見る。これは、お前のための戦争でもあるんだ」

確かに、そうかもしれない。

俺が一昨日拾った少女は、追われていた。それも命を狙われると言うかなり危険なレベルで追われて、逃げていた。

それを証明するかのように一昨日の昨日で、彼女を追っていた組織の人間がここを訪れた。不幸中の幸いにもその時に即戦闘とはならなかったものの、だが戦闘の意思があることを示す言葉を残していた。

それはつまり、相手が彼女を殺すこと（ここに至ってしまったら、目的は殺害以外に無いだろう）を諦めて居ないと言ふことだ。他勢力の事務所に訪れることほど、実は危険な事は無い。敵の巣窟へと飛び込むのも同じことだからだ。だが、相手はそれをしてきた。これは、彼女が組織にとってどれだけ有害であるかを物語っている。

なら、彼女を拾った俺がとるべき行動は消去法を使わずとも必然的に見えてくる。

「事務所の場所、わかるか？」

——にやり。

「今わかってるのは六箇所。そのウチの一箇所はA分隊が潰した。後はB、C分隊だが、東と南方面を当たってもらっている。だから、お前が担当するのは、北だ」

「了解した。人数はどれぐらい集められる？」

「みんなもう下でお前を待ってるよ」

茜はそう言っ窓の向こうを指差す。

下りたブラインドを指でどけて下を見ると、確かに五人ほど集まっていた。

「戦果を期待してるよ、臆」

今更だが俺は孤児だった——らしい。なぜ語尾にらしいが付くのかと言うと、俺自身、自分がどう言う経緯で両親や親戚の手から離れたかよく覚えていないから、どうしても、仕方がなく曖昧になってしまうのだ。

覚えている限りでは十歳には既に、B・Bと一緒に日々を過ごしていたと言うことだ。そういう意味では俺は非常に運がいいのかもしれない。ストリートチルドレンのように路上で危険と隣り合わせな生活をしないで済んだという意味では。まあ、今となってみれば、ストリートチルドレン以上に危険な橋を渡ってきたし、潜って来た修羅場の数も段違いなのだが、それもいい思い出だ。

B・B——『B・B運輸』の創設者。蒼色の髪を同じ青いリボンで後頭部に束ねるシングルポニー。彼女の髪型はいつもポニーテールだった。なぜほかの髪型に変えないのか、と尋ねると、これが一番邪魔にならないからと答えた。一切、色気に興味がない、今時少し珍しい女性だった。

興味があるのは銃器と子どもと金。どれが一番かと聞かれると、順番的には子ども、金、銃器。特に子どもに興味があった。

興味と言うと、少し語弊があるかもしれない。そうだな……一番当てはまる言い回しは、子どもが好き。そう、彼女は純粋に子どもが好きだった。まあ、『好き』と『興味がある』——どう違うかを問われれば俺には明確な線引きが出来ないけれど、彼女が子どもに向ける視線は『興味がある』では無く、一種の『憧れ』や『好意』に似ていた。今思い出してみると、そんな感じだった。

俺が何で昨日今日知り合った、まだ名前も知らない女のこのために面倒な事をしているかという、B・Bの影響が大きい。俺はBに命を救われた。そのことには勿論感謝してる。一生を彼女につき込んで返しきれない恩を受けた。

だが、彼女への恩返しが始まるや否や、彼女はすぐに逝ってしまった。死体は回収できなかったが、彼女が死んでしまったことは確実だ。だって、生きているなら、絶対に、地面を這い蹲ってでも、どんなことをしてでも帰ってくるはずだから。死ぬことよりも生き恥を晒しながらでも生きること、彼女は選ぶはずだから、帰ってこないと言うことは、そう言う事を、意味していた。

だから俺は、恩返しになっているかはわからないが、彼女の好きだった子どもが道端で一人身を震わせているのを見つけたら、出来るだけ保護している。とは言っても、まだ二十歳にもなっていない若造が同時に救える子どもの数なんてどうがんばったって一人だ。さすがにそれ以上は手が回らない。でも、拾ったからには徹底的に子どもの相手をしようと思っている。中途半端に首を突っ込んで、かえって子どもたちを傷つけないようにするためにも、今は一人が限界だった。だから俺は、一昨日拾った、歳もさほど変わらないだろう少女の明日のために、動いている。

形見と言うほどでもないが、B・Bの部屋を整理していると何本かのナイフが見つかった。その中でも目に付いたのは二股に割れた少し大きめの両刃のナイフ。同じケースにワイヤーがあったことから、おそらくB・Bはこれを投げて使うつもりだったらしいことがわかった。

最後まで何を考えているかわからない人だと思った。子どものこ

と然り、ナイフのこと然り。銃社会と呼ばれてるこの国でナイフを投げて戦う人間は、稀を通り越して馬鹿だ。人間の腕力で投擲されたナイフと火薬の爆力で発射される弾頭。どちらが先に相手の体に届くのが早いかなんて子どもでも一瞬でわかることだ。殺傷力で言えば、弾頭の種類にもよるが、この大型ナイフの方が頭一個分ほど上だろう。だが、それをカバーしてもお釣りが来るほどに弾丸の方が圧倒的に早い。

だが違った。その考えは根底から覆された。別に高周波を纏っている訳でもないのに材質を選ばず、岩だろうが鉄骨だろうが紙でも切るかのように切れすぎるナイフ——では、なかった。形状がナイフであることは、間違いないし、ナイフとしての実用性も十二分に備えていた。

このナイフが世界でもっとも切れる万能ナイフであることには違いないのだが、その認識は、このナイフを手にしてから半年で変えられてしまった。

いや、変えられたのは、俺の生き方そのものかもしれない。

■ ■

撃ち出された弾頭は嘘を吐かない。ファイアリングピンと呼ばれる針が弾の後方から前方へと移動してプライマーを押し、プライマ

ーに内蔵された火薬が爆発する。

ほんの小さな爆発が、弾頭の後ろにあるメインの火薬に火をつけ、弾頭と薬莢が分離し、弾頭は速度を上げながら銃身を通っていく。

銃身を通っていく際に弾頭は、ライフリングと呼ばれる螺旋状のミゾによってジャイロ回転を加えられ、空気の壁の中をまっすぐに飛ぶように設計されている。

ほんの十メートルほどなら、弾丸は狙った場所にほぼピンポイントで収まるが、徐々にターゲットとの距離が開いていくにつれてその精度は落ちていく。

長距離のターゲットを撃つ際には、風向きと風速は勿論の事、重力による弾道の下降、気温、気圧、湿度なども計算に入れ、若干の修正を行わなければ、ターゲットへ有効なダメージを与えることは出来ない。

そのため狙撃手以外にもう一人、観測手と呼ばれる人間が狙撃を補助する場合もある。

正直、個人的には居てくれた方が周囲の警戒を任せて狙撃に専念できるし、何分お喋りな性格の俺には、黙って集中するよりも、直前まで無駄に駄弁って居たほうがやりやすい。

「なあレイン、飽持ってない？」

「……」

「なあ、レイン。聞ってるのか？」

「少し、静かにしてもらえませんか。集中できませんから」

そう言っ隣でうつ伏せに寝転がっている女性は、バイポッドで安定性を高めた“ゲバードM1”の照準器を覗きながら、約一キロ先に居るらしいターゲットへと意識を集中させる。

蜂蜜のように艶々とした長い髪が覆う頭の中では今頃、ISのハイパーセンサーから送られてくる情報を見ながら、再度計算をしているのだから、俺も大人しく黙って状況を見守る。

とは言っても――

（これじゃあ観測手は要らないよな……）

と光学照準器で、レインが見ている景色を覗く。

そこにあるのは鉄骨をフレームにコンクリートだの何だのを使っただであろう壁面。人影は、皆無だ。

驚くなかれ、今俺の隣でIS『アイギスガード』のバイザーを部分展開して、ハイパーセンサーのサーモ機能を起動させている女性は、約一キロ先の壁の向こう側にいる男を狙撃しようとしているのだ。

本当、出来たら人間じゃないよな……。

「狙撃許可を……」

「許可する。撃つてよし」

俺の許可なんていちいち取らなくていいのに、と彼女の真面目さに内心溜息を吐いていると、巨大な破裂音と共にマズルブレーキによつて左右に吐き出された煙が薄く視界を遮る。

「命中を確認」

レインの言葉を受けて、俺はインカムを手に別働隊への命令を発する。

「マキナ、シグ、咲。突入を開始しろ」

『残念でした。もう始めてるよ！』

けたたましい銃声と悲鳴に重なり、マキナの陽気な声が聞こえた。別命あるまで待機を命じたはずだったんだが、壁を穿った音と同時に事務所へ踏み込んだらしい。

「レイン、手早く荷物を片付けて撤収するぞ」

俺が言うまでもなく、既に片付けを始めていたレインは、

「わかりました」

と言いながら“12・7x99mm NATO弾”を内包していた薬莢をポケットにしまった。

『こちらマキナ。事務所強襲作戦終了。負傷者ゼロ』

俺とレインが別ルートから車に到着したころ、インカムからマキナの声がした。

「ご苦労さま。ルート3Aで撤退行動を開始する」

『ルート3A了解。……でも茜のヤツ、ホントえげつない作戦を思いつくよな』

「今に始まったことじゃない」

『でも、対物ライフル使って狙わせるなんて、正気の沙汰とは思えない。さすがにあれば、いくら私でも吐き気がしたぞ』

「そうか。なら、茜に文句でも言って気晴らしでもしろ」

『文句を言って反省するヤツならいくらでも言うさ』

それだけ言って通話が切れる。

対物ライフルで壁越しからの狙撃から始まり強襲部隊が畳み掛ける今回の作戦は、茜の指示によるものだ。茜らしいと言えるらしい作戦だった。対物ライフルで人間を撃つ辺りが特に。

機関砲に使うような大口径弾を使用する銃、と言うのが対物ライフルの大きな特徴の一つだ。重い大口径の弾道直進性を利用することによって、超長距離からの狙撃を可能にし、種類によっては、二キロ先の人を撃って上半身と下半身とが両断して吹き飛ぶ程の威力がある、凶悪な代物となっている。

それを今回、壁越しからと言う考えられない、普通ならありえな

い所から狙撃することによって相手を混乱させ、そこを潰す作戦を、茜は俺たちに提示してきたのだった。

「そう言えばまた子どもを拾ったそうですね」

信号待ちをしていると、レインが急に話を振ってくる。

「銃弾を数発くらった黒髪のハイスクール女学生。人を殺すのが嫌いな朧さんがこうやって動いてるのも彼女のためなんですか？」

「……別に、そう言うのじゃない。俺は与えられた命令を――」

「と言っている割に、朧さん。人を殺すことが大嫌いな朧さんがこうやって事務所強襲作戦に参加している事が、私には不思議でなりません」

チラリとレインの方を見ると、何かを案じている様子で俺を見ていた。

俺はどう答えるべきか悩んだ挙句、

「レインこそどうなんだよ。なんで狙撃手なんて引き受けたんだ」

話をそらすことに決めた。

引き金を引いた回数が殺した数に等しい狙撃手。ターゲットをスコープで覗き込んで撃つため、人の頭や体の一部が吹き飛ばす様を目の当たりにすることが多く、それだけ罪の重圧が重くのしかかる。

突撃銃を握って撃ち合う人間は肉体的意味での死が多いのに対し

て、狙撃銃を使って狙い打つ人間は精神的意味での死が多いのが特徴的だ。

だが、助手席に座っている少女は、一切心を病むことなく、微塵も嫌なそぶりをせず狙撃手として働いてくれていた。

それが俺にとっては不思議でたまらなくて前々から疑問に思っていた事を、今このタイミングで、話をそらすタネに聞いてみた。

「死なせたくない人が……いるからです」

エンジン音に消えそうなくらい小さな声だったが、僅かながらに聞こえた。

あからさまな話題逸らしたたにもかかわらず答えた。

なるほど。レインはそう言う理由で戦っていたのか。

死なせたくない人のために銃を取っていたんだ。

俺にはそれが少し羨ましかった。

そういう人がいる事が。

自宅から少し離れた場所に車を止め、レインを含めた五人に周囲を警戒させて俺は自宅のアパートの鍵を開ける。

本当なら今頃、二つ目の事務所を潰すためにまた狙撃地点を探らなくてはいけないのだが、一昨日拾った少女のことが気になってしまい、我俣を言わせてもらって一度帰宅したのだ。

鍵を鍵穴から抜き出した瞬間だった、ドアノブへと手を伸ばす前に扉が勢い良く開く。

「——っ！」

いつも通りのドアを前にして襲撃されていない事を認識した安堵から警戒を緩めていた俺は、扉に頭をぶつけないために一歩引くことはできても、部屋の中から飛んできた人影を、腰からナイフを抜いて迎撃するまでには至らなかった。

俺の手がナイフを取る前に目の前から飛んできた膝が側頭部を掠め、太ももで頭を挟まれる。前に飛んできた勢いをそのままに相手は体重を前にかけてきたらしく、俺は背中から地面に倒れる。

そして、相手が少し引いた瞬間、首の頸動脈につめたいナイフの刃が当てられていた。

ナイフ——二股に割れた大型ナイフ。

「おい、お前……」

まだ少しズキズキと痛む頭を気にする暇もなく、俺に馬乗りになって二の腕を膝で押さえ込んでいる相手が口を開いた。

俺は相手の顔を見て少し反応に困った。血肉に飢えた獣のような凶悪な相貌で俺を見下ろしながら、獣で言うところの牙を俺の首筋に添えているのは、俺が拾った少女だったからだ。

「どこへやった」

「な、何を？」

俺は少々擦れ気味で相槌を打つ。それぐらい小さく動かさないと、首に当てられたナイフが皮膚を裂きそうだ。

「ロケットだ」

「ロケット？」

自身の内部に搭載した推進剤を噴射して推力を得るロケットエンジン、またそれを主要な推進装置とする飛翔体のあれか？

そんなものをどこに、どうやって？

いやそもそも、どこにそんなものを隠していたんだ、この少女は「勘違いしているようだから言うておくが、ロケットペンダントの事だからな」

ああ、ロケットって、頭文字が「R」じゃなくて「L」のほうだ

ったのか。

「どこへやった」

「いや、どこへって言われても……」

そんなもの付けていなかったからよくわからない。

「隠し立てするならここで殺す」

「待て待て、お嬢ちゃん。早まっちゃいけない。

青春時代を駆け抜けてる途中なのにどこの馬の骨か知らない男一人殺して人生を棒に振る気かい？　ハイスクールで待ってる彼氏さんが悲しむよ」

「ふざけてるのか？」

心なしが首筋から生ぬるい液体が伝う感触がする。

これってきつと血だね？　俺、首切られたよね。

「言え、私のロケットをどこへ隠した」

「いや、悪いけど俺がお嬢ちゃんを拾ったときにはロケットなんて持ってなかったから知らないんだ」

「なん……だ、と……」

ふっ、と俺の上に乗っている少女の体から力が抜けるのがわかった。首筋に添えられたナイフも地面に落ちている。

「……なら、お前に用は無い」

ハイライトが消えた黒い瞳が俺を見据える。

俺はその瞳に思わず息を呑んだ。黒瑪瑙を思わせる真つ黒な目。ハイライトが消えて今は深淵の闇のような瞳が俺を見下ろす。

絶対的な殺意。人を殺すことに躊躇いも戸惑いもない人間の目。

右手に持ったナイフを逆手に持ち替えて振り上げる。

「……死ね」

首を斜めに傾けて頭の位置を振り下ろされるナイフの軌道から外すと、こめかみの横を数ミリ単位の隙間だけを残してナイフの刃先が地面に埋まる。

だが、安心するのも束の間。ナイフは即座に引き抜かれ刃先だけがこめかみに向けられる。

そうか、俺は自分で拾ったこの娘に殺されて死ぬのか。

そう考えた途端、反撃する気が失せた。

いまからでも彼女の攻撃を防いで、彼女を拘束するのは容易い。

俺にはそれが出来るだけの力がある。でも、その力を意識的にシヤットダウンしてしまえば、振り子のように振り上げられたナイフは簡単に俺の頭蓋に割って入り脳漿に達する。

恐らく、痛みは一瞬。

「朧っ！」

声と共に響く消音器で軽減された発砲音。鉛弾が少女の腕を撃ち抜いて、鮮血が目の前に飛び散る。

「くっ、あッ！？」

俺の上で悲鳴を噛み殺した少女が蹲る。

「この女ッ！」

蹲っている少女を蹴飛ばして“SIG Sauer P250
シグザウエル”の銃口を向けていたのはマキナだった。

「大丈夫か、朧」

「まあ、いちおは」

首筋の傷を押さえながら俺は、ナイフを離して打ち抜かれた腕を押さえる少女を見る。

少女は、手負いの虎のように炯炯とした視線を俺たちに向けていた。

「殺してやる……絶対に殺してやる……」

「おい朧、この女学生か？ お前が新しく拾ったって言うのは」

まるで呪詛でも唱えるような少女の声を完全に無視して、マキナは少女が手放したナイフを俺に手渡す。その間も銃口は少女に向けたままだ。

「女学生だからって油断しすぎなんだ。最近の女学生は銃の整備なんて朝飯前って言うのが、いい女の前提なんだぞ？」

「そんな荒んだ知識をどこで覚えたのかは後々聞いてやるとしてだ、車から医療キット持って来い」

「はあ？ 誰を手当てするんだよ」

「この子に決まってるだろう。いいから持って来い」

「ああ、はいはい。了解しました」

呆れた風に一度肩を大きく竦めて銃をしまい、マキナは医療キットを取りに行った。

俺は取り合えずナイフをしまつて、少女の手の具合を見るためにしゃがむ。

「私に触るな……！」

そう言つて俺を払おうとする左手を軽く受け流し、少女の右腕を押さえる。

「くっう……」

「少し掴んだだけで悲鳴を上げるんだったら大人しくしている」

「私を撃った癖に……」

「ああ、正確には俺の部下がな。俺はお嬢ちゃんに手を出してないだろ？」

「変わりは、無い……うぐっ」

腕が見えるように裾を捲り上げると、不幸中の幸いにも肘の少し下を打ち抜かれていた。もし後十センチもずれていれば肘か手首を粉々に砕いて、彼女の右手は使い物にならなくなっていただろう。

だが、この傷を見る限り、そうなる可能性も無きにしもあらずだな。

「隴さん！」

「レインか」

片手に医療キットを持って走ってきたレインは、少女の傷が見やすい位置に腰を下ろすと、医療キットを開けて手早く準備した無針注射器を腕へと押し当てる。ぷしゅっと小さな音が聞こえた。

「何を打った……」

「医療用ナノマシンです。動かないでください。今、擬似皮膚を張りますから」

レインは手早く少女の腕に開いた二つの穴を擬似皮膚で塞ぐ。

「これでひとまず出血死をすることは無いと思います。
できれば病院で正式な免許を持った医者に見てもらいたいところ
ですが、そういうわけにもいかないのでしょうか？」

少女は答えることなく視線を擬似皮膚が張られた腕に向けていた。
お礼は言わないか……。

「すまない、レイン」

「いいえ。ただ、骨を弾頭一発分、綺麗に削られてますから、治つ
た後にそれまで通りの動きが出来るとは思わないことです」

レインの言葉はどこか警戒心と共に威圧的雰囲気を含んでいて、
その矛先は少女に向けられていた。
それが少女に伝わったのか、いつのまにかこちらに向けていた視
線を外す。

「なんで……私を助けた。誰も助けてくれなんて言っていない……」

「質問するよりも先にお礼を言うのが一般常識ってものだろう、お
嬢ちゃん」

「……」

だんまりか……。

まあ、警戒するのも当たり前と言えは当たり前か。

ならこっちから一方的に歩み寄っても磁石の反発力みたいに離れ

ていくのが目に見える。

「取り合えず家に入らないか？ お嬢ちゃんもその格好じゃ外に長時間いるのは耐えられないだろ？」

洗濯カゴから少女は着ていた服を引っ張り出してきて、それをも着ている。

彼女の治療のために（決して他意は無い）着ていた衣類を脱がしたときから不思議に思っていたのだが、その時も彼女を拾ったときも急いでいたということもあってあまり意識しなかったが、彼女がその服を着てみて、その違和感は何なのかかった。

薄汚れた白いつなぎ服の手足にベルトを三本ずつ付けた異形なゼンス。フードの淵とハイネックの襟元にはファスナーが付いている。一見するとファッション界の新時代でも切り開く気なのか？ と疑いたくなるような、いい意味で斬新、悪い意味で悪趣味とも取れる服。

全身像を見ることが出来た今なら、その服が一体何の目的で作られたのかすぐにわかった。

——拘束服。

「お嬢ちゃんの質問は、なんでお嬢ちゃんを助けた理由だったか？」

少女は意外にも俺の提案を受け入れ、再び俺の部屋に戻って、今はベッドに腰掛けている。部屋に入った際にすぐに飛び込んだきた倒れているクローゼットは見なかったことにする。

俺はクローゼットを椅子代わりに腰掛け、レインは窓側に立って少女を監視していた。

「その前に、一ついいか」

俺が話しを始めようとしてすぐ、目の前の少女が会話の腰を折る。

「なんだ、お嬢ちゃん？」

「その、お嬢ちゃんと言うのはどうにかしてくれ。虫唾が走る」

嫌そうに顔を顰めて睨み付けて来る。彼女が人を睨みつけるのは、クセか何かか？

だがしかし、これは名前を聞くいいきっかけになるな。

「なら、お嬢ちゃんの名前を教えてくださいませんか？」

「……」

また、だんまりか……。

命を狙われてる状態であれば、会ってまだ数分も経っていない人間に名前を教えるのにはやはり抵抗があるか。

名前を聞くのはまだ少し早かったか。

「……エム」

自らの失態に肩を落としていると、不意に少女の口が名前らしき単語を呟いた。

「エム？　それがお嬢ちゃんの名前かい？」

「だからお嬢ちゃんはやめろ。これからはエムと呼べ」

マゾヒストかよ、と突っ込んでしまいそうになったが、頭に直接響いたレインの声で止められる。

『完璧に偽名、ですね』

『聞けばわかるよ。エムって言うのは大方、自分の名前の頭文字とかじゃないか？』

『調べますか？』

『いいよ、別に。言いたくないなら言わなくてもいいさ』

「……」

ふと気が付くと、目の前に座っている少女——エムは、俺を冷た

い視線で見ている。

レインと秘匿通信で会話していたことを気取られないために、俺はすぐに話を戻すことにした。

「えっと、俺がお嬢ちゃん」「ギロツ」「……エムを助けた理由、だったか？」

俺も切り替えが上手く出来ないな。ついクセで『お嬢ちゃん』と呼んでしまうと思い切り睨みつけられてしまった。

「その前にお前の名前を教えろ……」

「ああ、ごめん。俺の名前は臍。こっちの女性はレイン。で、お嬢ちゃん」「ギロツ」「……エムを撃った赤褐色の髪の女性がマキナ」

「別にあの女の名前なんてどうだっていい。

……それより」

「ああ、たしか、お嬢……エムを助けた理由だったか？

えっと……取り合えず、趣味だ」

「……」

絶句してしまった。窓際に立ってるレインも呆れたように肩を竦めてる。

まあ、俺もこの手の反応には慣れっこだから気にしない。

「俺は、人助けが趣味なんだ」

思っていた以上に長い沈黙が続き、もしかしたら絶句しているんじゃないかって聞こえなかっただけかもしれないので、もう一回言った。

「嘘だ……」

「嘘じゃないさ。俺は、道端で転がってる子どもを見捨てることが出来ないんだ」

「偽善者が……」

汚い物でもみるような目で、唾棄するような口調で偽善者呼ばわりされてしまった。

自分でも、自分の行為を第三者の視点から見たとき偽善と呼ばれるだろうことはわかっていたが、真正面から言われるところも傷つくものだとは……。

B・Bは、いつもこんな気持ちを、抱いて過ごしていたのだろうか……。

「偽善と言われようがなんと言われようが、人助けが俺の趣味だから仕方が無いだろ」

「本当の目的は何だ」

「本当の目的って言われてもなあ。
ホント、そう言うのは全くなしに、人助けが俺の趣味なだけだから」

「……」

「……」

「……」

いやな沈黙が部屋に漂う。エムの目は相変わらず俺を見ていて、嘘をつくと言いたげに睨んでいた。

ここまで気まずい雰囲気がこの部屋を支配するのは、B・Bの風呂上りの裸体を見てしまった以来な気がする。

『おい、臍』

昔の淡い思い出を少し頭の中に描いていると、不意に苛立たしげな茜の声が頭の中に響いた。

『お前、一体どこで何をしてる。』

作戦の進行具合は？

まだ一つもクリアしてないのか？

と言うより、今どこにいるんだ？』

『いや、まあ、自宅？』

『……』

この沈黙。額に血管を浮かべながら狙撃銃の安全装置を外す茜が容易に想像できてしまう。

現実にも通信にも気まずい沈黙が流れる。誰から逃げていると言

う訳ではないが、逃げ場を無くした盗人の気分だ。

『とつとと作戦に戻れ。
了解？』

『や、ヤー……』

通信が途切れる。

ふと、視線をレインに向けると、向こうにも茜からの秘匿通信が入ったらしく、どうしたものと肩を竦めていた。

レインは一度咳払いをする。

「臃さん、そろそろ仕事に戻らないと」

「あ、ああ、もうそんな時間か。」

「すまないエム。この話しの続きは、帰ってきてからで構わないか？」

「……ダメだ。お前にはまだ聞きたいことがある」

「さっきのロケットの話か？」

「だったら俺は知らないぞ。俺がエムを拾ったときには持ってなかったからな」

「……そう、か」

エムは部屋に入って初めて、俺から視線を外して俯く。

理由は、ロケットペンダントを無くしたからだろう。中に誰の写真が入っているかは知らないが、ここまで強気に振舞っていた彼女が露骨に落ち込んでいると言う事は、よほど大切な人との思い出が詰まっていたに違いない。いや、もしかしたら写真の類は入っていない、ロケットペンダント自体が誰かの贈り物か形見と言う線もあるか。

エムの気持ちは、俺もよくわかる。まるで指の隙間から砂が落ちて行くように自分の大事なものが知らず知らずのうちに無くなっている。気が付いて指を閉じたときには時既に遅し。

それがどれだけ悔しくて、無くした事に気がつけなかった自分が惨めか、良く、知っている。

『……なあ、レイン』

俺は秘匿通信であるにも関わらず彼女に視線を向ける。

だが、俺が我俣を言う前にレインの秘匿通信が割って入った。

『どうぞ、彼女の探し物を見つける手伝いをして下さい。
こっちは私たちで何とかできますから』

『……なんで俺が言おうとしたことがわかるんだ、レインは？
もしかして、俺の頭の中に盗聴器でも仕掛けてるんじゃないだろうな？』

『何年一緒にいると思っているんですか、隴さん。
隴さんの性格は、メンバーの中で一番理解しているつもりですよ』

そう言えば、彼女とはメンバーの中で一番長い付き合いになるな。

と言うことは、俺の我俣に一番長く付き合ってくれているわけで、俺は本当に申し訳ない気持ちになった。

『ほんと、いつもすまない』

『気にしないでください。今の私がいるのも、B・Bや臃さんが居てくれたからこそですから』

そう言ってくれると本当に助かる。

こう言ってくれると、俺の行動は間違いじゃないんだって、思える。

一時的にも、報われた気分になる。

「では、臃さん」

「ああ。仕事、がんばってくれよ」「死ぬなよ」

「ええ」「わかっています。これぐらいで死ぬつもりはありません」

レインは俺とエムの間を通過って玄関に向かって歩き出す。

「お邪魔しました」

「おう」

ガチャンと玄関が閉まる音が部屋に響く。

部屋に残っているのは、取り合えず俺と未だに俯いているエムだった。

エムがこの後どんな行動に出るのか興味があつたので話しかけずに俯いた彼女をぼんやりと眺める。

「お前、仕事に行くんじゃないかったのか？」

「あゝあ、エム、俺からも一つ要求させてもらうが、俺を呼ぶとき“お前”はやめろ」

「私の勝手だろ、そんなの」

「なら、俺も同じ理由でお嬢ちゃんのことを“お嬢ちゃん”って呼び続けるぞ？」

エムはやつと面を上げて相も変わらず睨んでくる。

そしてすぐに立ち上がり玄関へと向かう。

「おいおい、どこに行くつもりだ？」

「出て行く。世話になったな」

「探す宛てはあるのか？」

「取り合えず、私が通ったルートを遡る」

「それはいいが、お嬢ちゃんが気絶した後のルートは俺しか知らな

いぞ？」

俺がそう言つとエムは玄関口で足を止め、ゆっくりとこっち向き直る。

「なら手伝え」

うわつ、それが人にモノを頼む態度か？

親の顔が見てみたいとは、まさにこの娘のためにあるような言葉だな。

「それには一つ条件がある」

「……」

聞いてやるから早く言えって目つきだな。ホント、こいつは人を睨みつけるのがクセになつてるな。

「取り合えず、俺の名前をちゃんと呼べ。」

お前ゝえとか貴様ゝあとかはやめろ。俺のことを呼ぶときは普通に臃か、まあ、どうしてもって言うなら臃様ゝあって呼んでくれても構わんぞ？」

「誰が呼ぶか。お前なんて蟹か蝸牛で十分だ。それが嫌なら猿って呼んでやるぞ？」

どれがいい？」

……随分と面白いことを言ってくれるじゃないか、このお嬢ちゃん……。

どれがいいかあえて答えるとすれば一番最後の猿だ。蟹も蝸牛も
食いにくくて仕方が無い。……猿って食えるのか？ 熊の手が食え
るんだから猿の手も食えるよな？

「協力する条件が俺の名前をちゃんと呼ぶだけなんだぞ？
こんな破格の申し出を不意にするのは——」

「ああつ、わかった。その条件を飲む」

かなり嫌そうに顔を顰めながら再び部屋へと入ってくるエム。

彼女のことだからもう少し粘ると思ったんだが意外とあっさり条
件を飲んだな。自分の利益は何事よりも優先する人間と言うことか。

「じゃあ、さっそく呼んでみる」

「……………」

おい、露骨に嫌そうな顔するなよ。

だがすぐに観念したように溜息を一つ吐いて俺に向き直る。

「お、おっ、おお——」

……………。

おいおい…………。

何で俺の名前を呼ぶのにそんなにぎくしゃくしてるんだよ、アン

タ……。

「おぼ……おぼ……お………」

「……………」

海で溺れかかっているときに助けを呼ぼうとするが海水が口に入
って上手く叫べない人間の構図が、○月×日の午後二時半の俺の家
にて出来上がっていた。

と言っかエムだ。

そのエムだが、俺の名前をちゃんと呼べないのがそんなに恥ずか
しいのか立ったまま俯いてしまっている。むしろそっちのほうが気
道が狭まって言いづらいだろうに。

俺の名前ってそんなに呼びづらいか？

「……………」

諦めやがった！？

諦めるなよッ！ どうしてそこで諦めるんだ、そこで！ ダメダ
ダメだ！ 諦めたら！

……何か大事なものを無くした気がする。

「仕方が無い。名前の方は後でちゃんと呼んでもらうとして、早速
出かけるぞ」

「本当か！」

「嘘をついても仕方があるまい。
……いや、その前に」

俺は彼女の格好を見る。

「な、何だ」

「どこかで服を買ってからにしよう……」

拘束服を来た少女を隣に歩かせるなんてどんなプレイ、もとい、
どんなバツゲームだよ。

1・7（前書き）

待ってくれた人はお待たせしました。初めての方は始めまして。水屋の娘は美しいと思っている作者でございます（笑）

戦闘描写を入れてみましたが、如何せん短い。長ければいいと言うわけでもないでしょうが、なぜか緊迫した雰囲気が出せない。用精進です……。

時刻は午後八時。エムは俺の再三に渡るの説得を不意にした挙句、拘束服の上からクローゼットの中にあつたB・Bのコートを羽織つて、俺の少し前を歩きながらロケットペンダントの搜索をしている。

「で、そのロケットはどんな形なんだ？」

「……」

これで何度目になるかわからない質問をするが、エムもまた何度目になるかわからない沈黙で返す。まゝた、だんまりか。身持ちが固いと言つか、寡黙と言つか。コミュニケーションを取るのが苦手なのか？

「おいおい、形がわからなきゃ俺が探せないだろ」

「何度も言つが、“お前”は道案内だけしてればいいんだ」

「……お嬢ちゃん？ 約束を守れないんだつたら案内しないぞ？」

俺の前を歩いていたエムが急に足を止めてこちらを向く。

そして、至極真面目な顔で俺を見る。

「おい、ボロ……。道はこっちでいいのか？」

「待て待て待て。ボロって何だよ、ボロって。俺の名前は臃だ。オ・ボ・ロ」

「お前の新しい名前だ。かつこいいじゃないか。ボロ衣のボロ」

「随分と格好悪い名前だな。他には無いのか？ 俺に似合いそうなカッコイイのは？」

「おい、ボロ雑巾のボロ。道はこっちで合ってるのか？」

「同じ布切れの類なはずなのに後者の方がショックがデカイッ！
ボロの前に『お』を付けろ、『お』を。それでそれを継続しろ。そうすれば俺もエムもハッピーになれるんだから安いものだろ」

「おい、ボロ。私を運んだルートはこっちで合ってるのか？」

「……アンタの会話文から“い”と“、”の全てを消してやりたいと思うのは俺だけか……？」

「ああ、いちおはな」

「いちおは……随分と曖昧な物言いをするんだな。一昨日の出来事だろうが。そんなことも覚えてないのか、この脳足りん」

「……こっちであつてる。ここから走って十分の所で俺はエムを拾った。これでいいか？」

「普通、歩いて何分かかるかを教えるだろうが。なんで走ったときの時間を私に教える。バカかお前は」

「……………」

エムのヤツ……目の前の人間をナイフで突き刺してやりたい衝動に駆らせる、かなりいい性格してるな……。

ベルトに通してるナイフホルダーに収まったナイフに一瞬手が伸びそうになるが、長年B・Bにからかわれて培ってきた最強の自制心が寸での所でそれをさせない。

（あ……）

しまった、B・Bのナイフをそのまま持つて来てしまった。本当はあんまり持ち歩きたくないんだけどなあ。

B・Bのナイフ——二股に割れた大型ナイフ。最高の硬度と切れ味を持つ。材質は不明。

（まっ、いいか、別に）

こんな小さいことに頓着しても時間の無駄だ。別に、使う機会も無いだろうし。機会が来ないことを切に願う。

「おい、ボロ。いつまで棒立ちしてるつもりだ。……お前、そうやって棒立ちしているとウドの太木に見えるな」

「褒め言葉のつもりか？」

「そうだ。お前の身長が高いことを褒めてる」

ウソつけ。俺はそこまで背は高くない。一七八センチと平均的だ。

と言うより、これ以上身長が伸びると困るんだよ。

銃撃戦のときに被弾する場所が増えるから。

「そう言えば、ボロ、私の銃をどこへやった」

再び歩き始めて十秒ほどすると、エムがそんな事を聞いてきた。

俺の呼び名はボロで決定ですか……。

「あゝあ、そう言えばエムを拾っただけで銃は拾わなかったな」

俺がそう答えると、前を歩いていたエムが急にこっちに来て胸倉をつかんでくる。

「ふざけるな！？ お前、銃が一丁幾らすると思ってるんだ！ いや、手に入れるのにどれだけ苦労すると思ってる！」

「いや、すまん。俺、銃は全く使わないから一丁幾らするかとか全然知らないんだ」

「なん……だ、と……？」

信じられないとも言いたげにエムは、目を大きく見開く。

「お前、銃を使わないでどうやって戦ってるんだ……」

「ナイフだけ」

B・Bが使おうとしていた二股に割れた両刃の大型ナイフとサバイバルナイフ、少し短めのダガーが六本。俺の現在の手持ち武器。

銃器は、正直、好きじゃない。

「それで今まで良く生きて来れたな……」

俺の言葉に呆れてかなり脱力気味に襟元をつかんでいた手が離される。

「俺は強いからな。大抵の修羅場じゃあ俺はビクともしないぞ?」

「私に殺されかけた分際でよく言う」

「うつ……」

それを言われると言い返す言葉が無い……。

いくら自宅の前で油断していたからと言っても女学生(?)に押し倒されてしまったのは、非情に恥ずかしい。

あんな所をもしB・Bに見られていたら「弛んでいるな、臆。どれ、久々に揉んでやろう」とかなり軽いノリで誘われた拳句、刃の付いたナイフと実弾の入った拳銃を使って地獄のような、B・B言う所の模擬戦を一日中やらされるハメになりかねないな。

一度まともな会話ができる人間と模擬戦が何たるかを議論してみたいものだ……。

「なに目を細めて黄昏てるんだ。気色悪い」

「……取り合えずこの先すぐ先だからとつと行こう」

これ以上彼女と一緒に行動していると鬱になってしまいそうだったので、俺は彼女を追い抜かしてスタスタと先に進む。

少し後に、エムが俺の隣まで駆け足でやってくる。

「……………」

「……………」

俺とエムは横に並んで歩く。

ただ視線をまっすぐに、人の居ない方に向かって。

「……………」

「……………」

「おい、ボロ……………」

「静かに……………。気づいてないフリをしろ……………」

俺は隣を歩いてるエムの頭に手を置いて胸元に抱き寄せる。

「お、おい……………！」

声こそ小さいが、少し頬を赤らめたエムが俺のわき腹を思い切り殴りつけてくる。

（うつ！…………随分といいモノを持ってるな…………）

「と、取り合えず、そのまま聞け、エム——」

俺がそう言うときエムはこの状況が何を意味しているのか察したらしく、眉間に深いシワを刻みながらも黙って腕を下ろす。

「敵の数は不明だが、十中八九、目的はアンタだ」

「そんなことわからないだろ。もしかしたらお前を狙っているかもしれない」

「じゃあ、賭けをしよう。この先にＴ字路がある。俺は左折、エムは右折して逃げる。これで、後ろの連中がどっちを狙ってるかが一発でわかる」

「……この悪魔。私がまだ戦えないのをいい事に……」

エムは毒づきながら肘打ちを入れてくる。それだけ元気なら戦えそうなものだがなあ。

と言うより、いちいち腹を殴ってくるなよ。

「はははっ、すまない。……Ｔ字路は左折。合図で走る。今更確認するが走れるな？」

「当たり前だ。戦うのは……すこし無理だが」

少し悔しそうな口調で顔を顰めたエムが後ろを確認しようとしたので、俺は一層強く抱き寄せる。

「おい……苦しい……」

「後ろを振り返るな。気取られる。……それと、ナイフだ。隠し持つとけ。使い方はわかるな？」

「愚問だな。ナイフぐらい扱える」

エムは俺が手渡したサバイバルナイフを受け取ると拘束服の袖口へと忍ばせる。

「走った後、私はどうすればいい……」

「ああ、出来れば物陰に隠れてて欲しい」

「……わかった」

エムのヤツ、意外と従順だな。いや、論理的に状況把握が出来ているだけか。両腕が仕えない自分が戦っても勝ち目がないと、ちゃんとわかってる。

俺は後ろをつけてきてる足音に耳を傾ける。

出来るだけ足音をあわせて移動してるせいか人数はおおよそでしかわからない。だが、耳を傾けるべきなのは、ベルトに差し込んだ拳銃が歩くたびに揺れてぶつかる金属音だ。

完全に日が落ちた暗黒街には人影がほとんど無く、それと同等に明かりが無い。僅かな光源といえば、夜空の星と壁のように高く立てられた古い雑居ビルの使われてないはずの部屋から漏れる何かの光。その中から喘ぎ声が聞こえるのはご愛嬌。

まるで俺のために用意されたような地形状態だった。

「……エム、曲がり角の二歩手前で走るぞ」

「了解……」

俺は胸元に寄せたエムの頭をゆっくり離していく。

そして、すぐ、俺たちは走り出す。

俺たちが動き出した後すぐに、後方から駆けてくる足音が響く。

それが開戦の狼煙であった。

■ ■

「くそ、見失った……」

二人の後をつけていた男の一人が、手に持った拳銃から弾倉を抜き取り残り弾数を確認した後、ポケットに入っていたライトとサイレンサーを銃身に装着して明かりを付ける。

スーツの下に防弾ジャケットを着た他の四人の男たちも同じようにライトとサイレンサーを装着して、二人の搜索を始める。既に日も沈んでおり、クリスマスが近いこともあって色鮮やかなネオンサインやイルミネーションが夜の街道を彩っているが、高層のビル群や古びた雑居ビルの間を縫うようにして出来てしまったここは違う。月明かりとライトしか光源がない。無頼漢アウトローの人間達が角突き合わせ、この場所を狙っている。理由は無い。ただ、自分達の領地シマを大きくしたいだけ。

建物の間の物陰、業務用ゴミ箱の中、雑居ビルの外階段を一階から最上階まで。隅から隅まで、見落としが無いように一歩ずつ、確実に歩みを進める。警戒の色はひしひしと感じられる。

「イテッ!？」

男たちに、僅かながら緊張が走る。

「どうした？」

「……石を投げ付けられたみたいだ」

「気をつける。ヤツはどこから襲ってくるかわからないぞ」

そう言つてさらに男たちが警戒を強くする。

嫌な汗が銃を握る手を湿らせる。いつの間にか男たちの足音しか聞こえない裏道には、緊張の糸が張られてそれが男たちの動きを緩慢なものにしていた。それもいたし方無いと言う物だった。彼らが狙っているのは、亡霊ファントムと呼ばれる少年だ。彼は、主目的の完遂に支障をきたす。いつからか、誰がそういう始めたのかは知らないが、彼の存在を知らない人間は、この領地シメを狙っている人間の中にはほとんど居ない。しかし、彼らも、その顔を見たのは今日が初めてだった。

ファントム

亡霊。その名の関する通り、経歴不明、住所不定、性別不明確、年齢不詳、その素顔も実はあまり知られていない。彼の素顔を知りたければ、大金を払って情報屋から教えてもらうか、彼らに何らかの仕事を頼んで顔を合わせるしかない。なにせよ、彼と始めてあった人間は、彼の若さと纏っている雰囲気ファントムに面を食らう。別に彼の雰囲気が刺々しいとか、常に殺気を帯びているとかではない。むしろ逆。彼にはおよそ殺気や威嚇と言うものが感じられない。似合わない。一切、全く。飄然とした態度で赤い髪を後頭部で束ねた女性の後ろに立っているばかりだ。チラリと目だけを少年に向ければ決まって柔らかな笑みを返してくる。

そんな亡霊^{ファントム}の正体を、銃を突きつけられてガクガクと震える情報屋から知らされたとき、何かの冗談かと思った。あまり笑えないが、耳が隠れないぐらいの長さで切られた藍染でもしたように綺麗な髪、まるでエンピツが何かで色を潰したように無機質な黒い瞳。正直言っ、て、こ、う、や、っ、て彼の迅速かつ的確な行動を目の当たりにして彼を探していても、彼が本当に亡霊^{ファントム}であるのか？と疑問を持ってしまふ。

ふっ、と視界の隅に黒い影が通り過ぎた。

「そこかつ！」

男の一人が、影の入って行つた建物の間をライトで照らす。

が、そこには誰も居ない。いるのは、目を不気味に光らせた黒い猫だけ。

「どうした？」

「人影が見えた気がしたんだが、どうやら見間違いだつたみたいだ」

そう言つて再び男は搜索に戻る。

だが、

「……………えっ？」

銃口と共にライトの向きを変えようとしたときだつた。ライトの位置が動かない。さつき猫が居た建物の間の細道を照らしたままだ。近くから肉の焦げる嫌な臭いがする。

不思議に思つて手元を見てみると――

「あ…… ああっ…… う、腕…… おおっ、俺の腕が…… うてがあああ
ああッ！」

仲間の一人が男の異常に気がつき、その異常性に目を疑いながらも男の腕部を照らす。

そこには、本来あるべきはずの腕――正確には両腕の肘から先がなかった。血は一滴も出ていない。まるで切り落とした後すぐに何も彫られていない焼き鑊を当てられて、強引に焼灼止血法でもされたいだ。切り落とされて男の足元に転がる腕も同様に切り口を焼き固められていた。始めは腕をなくしたショックで叫ぶ。

人生で初めて嗅いだ人肉と人骨の焦げる臭い。それが奇しくも自分の両腕から発せられたショックに男は膝から崩れ落ち、手元で起きたことのはずなのに視認出来なかった事と、少したった今両腕から全身に駆け巡る激痛に赤子のように悲鳴を上げる。

「う、うつ、腕ッ……俺の腕がああアアアアッ！ アアアアア
アアアアアアッ！！！」

「クソッ！ 全員固まれ！ 一人になれば殺されるぞ！」

激痛からその場をまともに動けない男を放って、それ以外の男たちは、互いに背中を預けて四方を警戒する。

誰からか、どこからか、見られている気がする。それも、一箇所からではない。前に後ろ、右に左、上に下。全身が何者かの視線を

感じる。

——亡霊。

まさに相手にはその通り名が当てはまると、いつの間にか小刻みに震える銃を握りながら、そう、思った。仲間が両腕を切り落とされたとき、他の四人とも、腕を切り落とされた瞬間が見えなかった。

影も形も、足音も聞こえない。なのに、何ともいえない視線が自分に向いてる。

気色の悪い視線——ではない。

何も感じられない視線——だ。

見られている、と言うのは感覚的にわかる。だが、その中にある感情と言うものがまったく読み取れない。感じ取れない。感じられない。こういう場合に人間なら誰しも感じるであろう、出してしまうだろう雰囲気や感情が、視線に乗っていない。明確に見られていると言う不気味な感触だけが体中から感じられる。

見られているのに、感じられない。

見られているとわかるのに、相手の感情がわからない。

ライトで照らされた向こう側、何かが光を反射させる。

「——ッ！」

その光めがけて引き金を引く。その何かに着弾するたび、何かが

弾ける音がする。

四発目を撃ったところで、銃声に重なって弾ける音が何なのかわかった。既に飲み干した酒瓶だ。

「……………」

嫌な汗が全身の汗線からあふれ出る。

見られている……。

確実に、見られている。

見られてる。

観られてる。

診られてる。

看られてる

視られてる。

見られてる。 観られてる。 診られてる。 看られてる。 視られてる。

[illegible]

見られてる。	見られてる。	見られてる。	見られてる。	見られてる。	見られてる。	見られてる。
観られてる。	観られてる。	観られてる。	観られてる。	観られてる。	観られてる。	観られてる。
診られてる。	診られてる。	診られてる。	診られてる。	診られてる。	診られてる。	診られてる。
看られてる。	看られてる。	看られてる。	看られてる。	看られてる。	看られてる。	看られてる。
視られてる。	視られてる。	視られてる。	視られてる。	視られてる。	視られてる。	視られてる。

—ミテル。

視線恐怖症になってしまいそうだった。

いや、なる。確実に。

明日から周囲の人間の視線が怖くて外に出歩けなくなる。

視界に納まるだけの人間だけではない。背後で歩いている人間すらも自分を見ているのではないかと偏執病パノイアになって精神をすり減らしてしまう。

明日があればだが。

「.....」

頭上から勢い良く風を切る音がする。

刹那、銃倉を変えていた男性の脳天から股下までを繋ぐ一閃が走った。正中線からずり落ちるように男は二つに分かれて倒れる。切断面はさつきと同様に焼き固められていた。

「えっ？」

ズチャリと水袋が落ちた音がした方を見ると右半身と左半身に切り分けられた男が転がっていて、あまりにも逸脱した光景に思考が停止する。

それが、命取りだった。

返り血一つ付いていない純白の仮面の男がカタパルトで弾かれたように一瞬で目の前に迫ってくる。

ザワリと背筋に蛆虫でも這うような感觸が走る。だが、その感觸も一瞬だった。首に白銀の一線が入る。きっかり二秒後、切り口に沿って頭と体にズレが生じて、ゴトツと頭が落ちる。

二人目を切り捨てた後、間髪入れずに別の男の体に手本のように綺麗な袈裟切りが刻まれる。悲鳴と共に噴出すはずの鮮血は、高熱で溶けた皮膚によって塞き止められる。

少しばかり間合いのある男の肩にダガーを投げて一瞬動きを遅らせた隙に、右手に持った日本刀を男の胸に深々と突き刺す。皮膚、筋肉、骨、肺、筋肉、皮膚。それらを一瞬で串刺しにする。そこでも、血は出てこない。日本刀と体の切れ間に溶けたゴムのような皮膚が蓋をしていた。

「……カハッ！」

男が吐き出した血。そこで初めて白い仮面が赤く染まる。

「この……化け物……が。し、ねえ……」

最後の力を振り絞り、手に握っていた銃を仮面の男に向けようとする。

「……………」

銃口が向けられた瞬間、突き刺していた刀を勢い良く持ち上げる。

「うぐっ！」

刀の刃が首元まで至ったときには、男はぐったりとしていた。

刀をゆっくりと抜き取る。男の腰には鞘は無い。あるのは少し大きめのナイフホルダー。中身は無い。

「おい……………」

僅かに残った血の水分が高温の刃で蒸発して異臭を放つ。干から

びた血は刀を軽く振ることでパラパラと風に乗って簡単に取れた。

「聞きたいことがある」

「……………」

高熱を放つ剣先を眉間に向けられても、男は震えながら仮面に開いた二つの目を力強く睨みつける。

「なぜあの少女を狙う。彼女は一体何者だ」

「ふひひひっ、お前……あいつが一体誰なのか、知らないで匿ってるのか？ ……とんだ、世間知らずだな」

せせら笑いを浮かべる男の顔色は凄まじく悪い。腕を切り落とされた激痛と切り口を焼き固められた劇痛で笑うことですらつらいはずだ。

「殺すなら、殺せ……」

「随分と潔いな。だが、残念だったな。アンタを生かしておいたのは、色々聞きたいためなんだ。だから、色々喋ってもらうまで生かしておく」

刀の側面に残っていた血の粉を革製の手袋で拭き取って、吹き飛ばす。その後、刀を手の中で一回転させる。すると、ぐにやりと刃が折れ曲がる。再び柄が手元に来る頃には、二股に割れた大型ナイフに変わっていた。

そしてナイフを再び手元で回転させると、形が変わった。



（静かになつたな……）

エムは隠れてから十分、銃声と悲鳴が完全に途絶えたので、比較的動かしても痛みの無い左手に抜き身のナイフを持って顔を少し出す。

こうも静かだと、自分の命を狙つてゐる人間が近くにいるかも知れないというのに緊張感よりも寒々しさすら感じるから人間とは思議なものだ。

臃とは、曲がり角を曲がつてすぐに分かれた。

『お茶でも啜つて暇でも潰しててくれ』

と投げ渡されたお茶の入ったペットボトルは既に空だ。緊張していたから喉が渴いたはずなのに、今は渴きよりも恐怖が頭の中を先行していた。言いようも無い戦慄。

前後左右を見て人影がないことを確認した後、エムはその場から動き出す。臃の家のクローゼットにあった女性用の黒いコートが日の落ちたアウトローの街には迷彩服代わりに働いてくれる。

足音を立てずに、壁を背にしながら、音に耳を傾けながらゆつくりと――

「わっ！！！」

「ひゃっ！？」

急に死角から大声が聞こえてエムはみっともなく素っ頓狂な声を上げる。

「ハハハッ！ ひゃっ！？ なんて、随分と可愛らしい悲鳴を上げるんだな、エムは。ずっと仏頂面だから能面でも付けてるのかと思っただよ」

エムが半身になりながら声の主と距離を取る。視線の先には同じく黒いコートを着て、腹を抱えて少し涙目になりながらげらげらと笑う臃がいた。

「いやあ、今のはかなりレアな表情だな。もっと他の表情も見せてくれよ」

「おい……………お前、今がどんな状況か――」

「心配しなくても、全員おっぱった。だから、もうそんな肩肘張らなくても問題ない。……………って！ コラコラコラッ！ ナイフを何で俺に向けてるんだ！？」

顔を赤くしながらナイフを持って肉薄してくるエム。

「殺す……………絶対に殺す……………私をバカにしてッ！」

「いや、バカになん——てっ!？」

首を狙って伸びてきたナイフをヒラリとかわす。

そこから続けて攻撃をするエムだったが、臍はひらりはらりと紙一重ではあるが危なげなくかわす。

頭部や胸部を狙った突き、首筋を狙った切りつけ、そこから切り替えて骨の少ない鳩尾への突き。

その一撃一撃がエムにとっては本気の攻撃。それが証拠に、ナイフを振るたびに鋭く風を切る音が鳴り続けている。

しかし、自分を半ば本気で殺そうとしてくる相手を目の前にしても、臍は笑みを浮かべ、逆にナイフを駆使して攻めているはずのエムは息を切らし始めていた。

「おゝにさゝんこつちらゝ」 手のなる方へゝ ほらほら、エム。息切れしてるぞ?」

「……お前……底なしの体力だな……」

「体のつくりが違いますから。さて、じゃあナイフは返してもらおうか」

エムが突き出してきたナイフを受け流し手首を掴んでひねりあげて、ナイフを取り上げる。

「っ……。少しは手加減しろ。こっちは怪我人だぞ……」

「俺をナイフで殺そうとしたヤツの言い草か、それが？ ま、いいか。俺、強いし。そう簡単には死なないし」

本当にどうでもよさそうに右斜め上を見ながらナイフを腰のホルダーに戻す。

「……私に殺されそうになった分際で何を言うか」

「ふむ、そうだな。訂正、俺は悪運も強い」

「まあ、確かに、悪運は強いな」

「……まあ、そう言うことにしておこう」

これ以上問答を続けても時間の無駄だと思った臃は、早速話を切り上げて帰宅の途につく。

「……おい、臃。帰り道が変わらないか？」

なぜか表通の方に出たので深く被ったフードの下から——ふつと視線を道路の向こう側のきらびやかな店へと向ける。そこには『W
クリスマス
ein nachts^{セール}verkauf』と書かれた横断幕を店のショー
ーウィンドウに掲げた飲食店があった。明らかに、臃が寝床にしてい
る外装は小汚いアパートがある裏道の方ではない。

「今日から寝床を変える。さすがにあの辺まで追っ手が来てるのに俺の家でお前を匿ってられないからなあ」

今日から——とは言っても、一昨日臃に拾われ、今日目覚めれば

かりのエムにとって、意識的には一日分も過ごしていないあの部屋が寢床だとは思っていない。

「……別に私は、お前に匿ってもらわなくても生きてける」

「へっつ、銃もナイフも近辺の地理情報も金も持っていない。果てには着てる物は拘束服な上に両腕は負傷中。なのに追っ手から逃げ切るつもりなのか。随分と勇ましいことで」

「……………」

「あれ？　へそ曲げちゃった？」

「……鬼。……悪魔。……サディストめ」

沈黙した後にエムの口から出た悪口を聞いて少し声を殺しながら笑う。臃は、どこか楽しげだ。

「それはいい。俺はサディスト。エムはマゾヒスト。いいコンビじゃないか」

「誰がマゾヒストだ。私は――」

ハッとなり、エムは口を閉ざす。

（私は、一体何を……）

——口走ろうとしていた。

その『何』かを明確に理解したとき、エムは隣を歩いている男——出合つてまだ一日も経っていない朧の顔を見上げる。エムの身長よりも頭一個分近く朧の背は高い。

若鷹を思わせる青年の顔は、まだ大人になりきっていない証拠。しかし、どこか達観して物事を見ていそうな落ち着いた雰囲気。藍染でもしたかのようににはつきりとわかる綺麗な藍色の髪も相まって、彼を横目で見た女性の七割ほどが、その視線に興味と好意を乗せて彼とすれ違つた後に後ろを振り返る。男はその視線に気が付いていないようだった。

隣の男は先ほどのことを既に忘れたようで、何が楽しいのか口元に微笑みを浮かべて、少し音程の外れた鼻歌なんて口ずさんでいた。随分と暢気なものだ。

今更思つてみたが、この男はどうやってナイフだけで追つ手を追いついたんだろうか？ 見たところ歩き方も普通で、表情にも苦痛の色は見受けられない。果てには返り血が一滴も見当たらない。

（まさか、無傷で勝つたのか？）

それは、ありえない。

ナイフしか持つて居ない状態で多人数を相手にするには、相手に気づかれずに一撃でしとめていくしかない。いくらスニーキング能力に秀でていても、多人数相手にそれが最後まで上手く行く確立は限りなくゼロに近い。

身体能力が『あの人』に近しいものがあれば出来なくもないだろうが、そんなことはありえない。『あの人』の身体能力、反射速度は常人のそれを大きく逸脱している。そんな人間がこの世にもう一人居るとは考えられない。

「ん？ エム、どうしたんだ？」

いつの間にか立ち止まっていたエムに気がついた隼は、優しく微笑みながら小首をかしげて振り返る。彼はコロコロと表情を変える。ここに来る前——アパートでは、真摯な態度で向き合っていたのに対し、追っ手につけられていると気がついた途端、摯実な表情に変わり、今は、優しい笑みをこちらに向けている。

「おい、隼……」

「どうした？」

嘘くさくないが、そのどこか芝居がかった笑みが、彼の本性を見抜く邪魔をする。

一日分も一緒に過ごしていない人間の本质がわからないのは当たり前だが、それでも、第一印象と言うものは人間だれしも存在する。

エムは、ここで初めて、目の前の男がどんな人間であるかわからなくなってしまう。会話をしてみても第一印象は、頭のおかしな偽善者。自分でも自分の行動が偽善だと理解している風ではあったが、自分の命を取ろうとした人間ですら助けようとする、お人よしを通り過ぎて馬鹿すぎる偽善者。

こんなに怪しさ満点で、しかも変な男達に追われている少女を助けようとする偽善者が、この世界の一体どこに居る？ 映画や漫画じゃあるまいに。

そうだ。

こいつは偽善で私を助けてる。

きっと、ロケットが見つければ何かしら要求してくる。

——そう、考えていた。

だが、さっきの行動は、この男にとって、どんな利益をもたらす？

ロケットを見つけたとき、これを口実にさらに要求を上乗せするため？

そうだとしても、危険な賭けだった。ハイリスク過ぎる。一歩間違えば自分が死ぬかもしれない。人間は自分に危険が及ぶこと損な役回りになることを極力避ける生き物だ。それが自分の命に関わることであればなおさら、見ず、聞かず、触らずに自分の身から極力遠ざけて、保身を第一に行動する。

自分の身の危険性と利益を天秤にかけたとき、危険が低く利益が高ければ誰もが飛びつくだろう。

だが、さつき——今の状況は違う。

死ぬかもしれないほど危険性が高く、まだ成人にもなっていない少女が提供できる利益が天秤に吊られた左右の皿に乗っかっている。

あまりにも割に合わなさ過ぎる。

一般的に考えて少女を見捨てて保身を取るはずだ。

（はず……なんだが……）

目の前に居る男は、エムが見てきたどの人間のパターンにも当てはまらない。

銃を持っていると容易に予想が出来る相手に対し、手持ちの武器がナイフだけだと言うのに、彼は打って出た。

戦わずに逃げ続けて相手を撒くと言う手段もあつたはずなのに——だ。

地理的有利を手にしても、いざ対敵したとき、拳銃とナイフ——遠距離と近距離では、話にならない。暗闇にまぎれて奇襲の利を得たとしても、その効力は一瞬だけ。混乱が収まってしまえば敵は情け容赦なく撃ってくる。一瞬で蜂の巣だ。

「おゝい、立つたまま考え事してると往来の邪魔だぞ？」

一向に質問する気配が無いエムに近づいて、目の前で手を振る臃。

臃がそう言っている矢先、エムは、後ろから来た楽しげに会話する男女の片割れにぶつかってしまう。

熟考していたエムは、不意に後ろからきたはずみに押される形で、目の前に居た臃の胸に手を当てて身を寄せる体勢になってしまった。臃はふわりと体をエムの正面に移動させて優しく受け止める。

「大丈夫か？」

「だ、大丈夫だ……！」

少し視線を上げると心配そうにエムを見る臃の顔が思っていた以上に近くて、彼を突き飛ばす勢いで離れる。その拒否っぷりに苦笑いを浮かべて気まずそうに頭を掻く。

「まったく、考えに耽るのは構わないが、それはもう少し休めるところでしてくれないか。な？」

「あ、ああ、そうだな……。で、新しい寢床はどんな場所なんだ？」

「ふむ……」

何やら神妙そうにアゴに手を当てて唸る。

「ところでエムは、ラブホと事務所、どっちがいい？」

「ら、ラブホ!？」

いきなり突拍子も無いことを言われて狼狽するエムを、周囲の人間の一部が奇異な目で見る。

「ああ。いちおうラブホは客のプライバシーを保障してくれるからなお前みたいな、物騒な輩が安心して寝泊りするには丁度いいんだ」

「あ……そう言うことが……」

「……一体何を考えてたんだ？」

ニヤリ、と口元を手で隠しながら鬼の首でも取ったように笑う臃してやつたり、といった感じた。

「別に、何も……」

「頬をほんのり赤く染めて言われても説得力がないぞ？」 もしかして、そう言うことを期待してたのかなあ？ 見かけによらずえっちなあゝ、エムは」

「ち、ちちちっ、違う！ 断じて違うッ！ 別に私はそんなことを考えてはいない！」

目の前で盛大にうるたえる光景が少し可愛らしい。ここまで動揺してくれるとちょっと動揺させたくなったが今日は諦めた。

「で、ラブホと事務所、どっちがいいんだ？」

「……事務所」

さっきの失言が未だに頭の中に残っている。幸い、周囲の日常言

語が日本語ではないので二人の会話は、日本語がわかる一部の人間しかわからないためそこまで焦る必要は無い。無いのだが……往来のど真ん中で「ラブホ」なんて単語を大声で言ってしまったんだ。恥じるなど言う方が無理がある。

「さて、なら、とつとと事務所に行くか。今日は疲れたからなあ」

大きく背伸びした後、臃はくるりと踵を返し、事務所へ向けて歩き出す。

エムもその後を少し躊躇いがちに続く。

1 - 7 (後書き)

エムの素性が明かされていないから結構大変だな……。

さて、主人公のISをどうしようか、結構本気で悩んじゃってたりします(オイ)

使い古されたガンダム系は無いとして、やっぱりオリジナルか？
いや、それだと作者の文才では、読者様にイメージと雰囲気を与えられない(泣)

よって、他の作品の機体をISにリメイクしなければ……。難儀な話です。

「何でこの女が事務所に居るんだよ！ 説明しろ朧！」

俺がソファに座りながら味噌汁を啜っていると、朝一番の事務所に、机に身を乗り出したマキナの怒鳴り声が響く。

「俺の家で匿っていたんだが、追っ手に居場所をしられてな。当分はここに住ませよう」と――

「ざけんなッ！ こいつはお前を殺そうとしたんだぞ？ なんてそんなヤツをここで匿うんだ！ こんな売女、道端に放って野垂れ死にさせておけばいいだろ！」

ズビシッ！ と俺の隣でキュウリの浅漬けを摘んでいるエムを指差す。

売女って……、いや、確かに拘束服を着てたらそう見えなくもないが……。

「そうです朧さん。なんでこんな女をここに匿うんですか？」

給湯室から俺の分と自分の分だけ（・・）湯のみを持ってきてお茶を入れてくれるレインがエムを睨みつける。

「それに、今回の戦争は彼女が原因だと茜さんに聞きました。爆弾を懷に抱えて自爆したくありません」

「別に、プリンチップに銃さえ渡さなければサラエボ事件は起きな

いだら？」

「その言葉、ぜんぜん説得力がありません。既に戦争は始まって、今は小康状態にあるだけです。それに、彼の手銃が渡らなくても、別な少年がサラエボ事件を起こしたでしょう」

だろうな。

ふむ、最近はずっとレトルトやパンを買ってばっかで料理をしていなかったが、腕は落ちていないようだ。

大根と油揚げの手抜き味噌汁だが、美味い。

「なに味噌汁飲んで和んでんだ！」

「まあまあ、落ち着けて、マキナ。鍋の中に味噌汁残ってるぞ？」

「ああ、後でもらう。……じゃねえ！」

バン！ と机を叩く。全く、こっちは食事中だって言うのに。静かにしてほしい。

「おい、臍。戦争って一体何の話だ？」

俺が韓国海苔をまいてご飯を食べていると、隣でキュウリを摘んでいるエムが尋ねてくる。てか、皿に山のように積んであったはずの浅漬けキュウリがいつの間にかない……。

どんだけその漬物気に入ったんだ。まあ、気に入ってもらえて何よりだが。

「エムを拾った次の日、アンタを探してる人間がここに来てな。宣戦布告してきたんだ」

机の脇に置いてあった密閉パックの中にあるキュウリを箸で摘んでいたエムの手が止まる。

「まあ、気にするな。幸い、俺たちの参謀は戦争好きだったからな。取り合えず、この辺にあった事務所は完璧に潰したから向こうもこれに懲りたら——」

塩味の利いた韓国海苔でご飯を巻いて口に運ぼうとしたときだった。この事務所の唯一の出入り口から扉を軽くノックする音がする。

俺がご飯を咀嚼している間に扉の向こう側を視たらしい（……・）
・レインが眉間にシワを寄せる。

『銃器を持った男が五名、扉の向こうに居ます』

直後、扉の向こうから男性の声が聞こえる。

「失礼、ここを開けてもらっていいですか？　ここに——織斑千冬さんが居るのはわかってるんですよ？」

柔和な男の声がした。俺の隣に座っていたエムが雷にでも打たれたかのように体をビクンとさせる。

「どうした？」

「……………」

「おーい？」

エムは扉の方を見たまま固まっでいて、反応が返ってこない。取り合えず、俺が応対しようと扉に歩いていこうとすると、不意にレインが立ち上がり、

「私が出ます」

と言って、扉をあける。扉の向こうにはレインが言ったとおり男性が五人。いかにも荒事専門という顔をしてる。目の前の男性以外はポケットに手をつ突っ込んでこちらを睨んでいる。

「始めまして、B・B運輸のみなさん。私の名前はトールキンと言います。以後、お見知りおきお。さて、ここの代表者の方はどなたでしょうか？」

俺より頭二個分ほど背の高い、黒髪オールバックの黒スーツを着た、いかにも仕事が出来そうな初老の男性は、両手を大きく広げた後、右手を自分の胸に当てて頭を下げる。

結局、俺が出ないと話にならないようだ。

俺はレインを下がらせて彼と対峙する。

「代表者はいちお、俺だ。アンタ、アジア系の顔つきなのにトールキンって名前なのか？ ハーフか？」

「いいえ、私たちの組織では基本、本名を明かさずに偉人たちの名前で互いを呼び合つのです。それで、単刀直入に言わせて——」

「すまん、出来れば出直してきて欲しいんだが。いま食事中でな」

「おや、これは失礼。ですが、我々も急ぎの用事でして、手ぶらではあまり帰りたくないのです。それに、私は荒っぽいのは苦手です…」

キツネのような切れ目が笑みを浮かべることでより一層細長くなる。

ふと、後ろに控えてる男たちに目をやれば、腰に挿してあるであろう銃をいつでも抜けるように身構えている。

「なら、取り合えず、用件だけは聞いておこうか」

「単刀直入に申し上げます」

そこまで言ってトールキンは俺の後ろ——事務所内を見る。

「彼女——織斑千冬を我々に返していただけないでしょうか？」

視線を事務所内にいるエムに向けると、その漆黒の瞳がトールキンを睨んでいたが、僅かに怯えの色を滲ませている。

その目は、彼女を拾う前に、二回ほど、見たことがあった。

それも、さほど昔ではない。

ごく最近。

一ヶ月にも満たない、ごく最近。

「すみませんトルキンさん。織斑千冬……とは、一体どこの誰で
しょうか？」

「……はい？」

トルキンは俺の言葉に面食らったように首をかしげる。

「残念ながら、この事務所には織斑千冬と言う人間はいません。こ
の事務所に居るのは、B・B運輸の従業員とエムと言う少女だけだ
けです」

「……………」

「どうかお引取り願いたい」

「このガキッ！ こっちが下手に出てれば調子に乗りやがって！」

階段の下で待機していた男の一人が腰に手を回して銃を取る。

ズダンッ！ と重苦しい破裂音が響く。

その後すぐ、階段の上から茜の声がする。

「おやおや、これはこれは、トルキン参謀。わざわざこんなしけ
た事務所までなんの用だ？」

その手に持つ狙撃銃のボルトを引き出し空薬莖を排出するところ
を見るに、どうやらさっきの発砲音は茜の狙撃銃が後ろの男が取り

出した拳銃を撃ちぬいた音のようだ。それが証拠に男の足元には銃身の途中から二つに割れた銃が転がっている。

「どうも、ミスアカネ。ご機嫌麗しゅう」

「ああ、どこかの誰かさんのせいでぜんぜん麗しくないが、取り合えず御機嫌ようとは言っておこう。で、この度はどのような用件でここに来た」

新しく弾丸を押し込んだ狙撃銃を片手に階段を下りてきて俺の隣に立つ茜は、アジア系の血を引いている割には大分長身なトールキンを少しばかり見上げながら尋ねる。

「ええ、ここに居る織斑千冬と言う女性を返して欲しくて参上したのですが、この少年が、ここには織斑千冬は居ないと言いまして」

茜は俺を押しつけて事務所の中を覗く。

しばしの間、エムと睨みあう。

『……おい、臍』

エムを見たまま秘匿通信を繋げてくる。

『彼女は本当に織斑千冬じゃないのか』

『ああ、違う。彼女はエムだ』

『私が聞いているのはサドかマゾかではなく——』

『彼女の名前だ。彼女は自分のことをエムって名乗ったんだ。それ以上でもそれ以下でもない』

『……偽名と言う線は？』

『十中八九、偽名だ。でも、俺にとってそれは関係ない。本当の名前を教えてくれないのは少し気分が悪いが、言いたくないのに言ってくるはずがないだろ』

茜は最後に『関係ない、か……』とぼやきながら、呆れたように大きく溜息を吐いて、既に後頭部でまとめた赤い髪を勢い良く振りながらトールキンに向き直る。

「トールキン参謀、彼の言うとおり、ここには織斑千冬と言う女性は居ません。と言うわけですので、とっととお引取り願いたい」

茜の挑発的な笑みに掛かったのは、下の階段で待機していた男たちだった。

だが、トールキンが片手を挙げると動きをピタリと止める。

「……彼女を匿って、B・B運輸は一体何を考えているのです？彼女を匿っても、あなたたちには利益は無いでしょう？」

「はて？ 私たちが一体誰を匿っていると言うのです？」

口調は大分柔らかく、声音は冷淡に。スコープを覗くときのような静けさで告げる。

「……………。あなた達は我々との全面戦争がお望みですか？」

「宣戦布告は既に受けている。今は互いに英気を養ってるだけだ。休憩が終わり次第、お前らの組織を完全に潰すべく、行動を開始させてもらう。」

「彼女をこちらに引き渡して、手打ちをする気はないのですか？」

「手打ちをする必要性が無い。お前達のような弱小組織程度に、私たちが逃げ腰になると思ってるのか？ お前達こそ、こっちに金を渡して終戦した方が身のためだ」

互いに一步も退かない。茜もツールキンも。上から見下ろしてくるツールキンを見上げる形で睨みつける茜の目は、かなり好戦的に目を輝かせていた。二人とも戦争マニアである事は一目瞭然。一触即発の雰囲気を感じ知したのか、後ろにいたレインとマキナがいつでも銃を抜けるように身構える。

ここまで来ると売り言葉に買い言葉。二人はこの会話が不毛の平行線に行き着いたと見て、睨み合いを終わらせる。

「仕方ありません。今日のところは出直すとしましよう」

露骨に肩を竦めながら決意したツールキンに、部下は、

「……いいんですか。ボスは納得しませんよ？」

少し控え気味に意見する。

「まあ、ボスも堅物ではありません。訳を話せば納得してくれるでしょう」

部下に対しても丁寧な言葉遣い。彼の口調は、そう言う性格からだったのか。

ある意味、俺と似ている。

トールキンは俺と茜に向けて笑みを浮かべながら一礼して、階段をゆっくりと下りていく。また来る、とでも言いたげな視線だった。後で塩でもまいておくか。

『……ビルから出たようですね』

「そうか……」

レインの秘匿通信が聞こえた瞬間、

「痛ッッッッたああああッ!？」

突如、俺の後頭部にカナヅチで殴られたような衝撃が走る。その鈍痛が、狙撃銃の銃身をバットを持つように両手で握って、フルスイングで俺の頭を床尾でぶん殴った衝撃だと知ったのは、鬼のような形相で俺のことを見てる茜を視界に捕らえたときだった。そんな風に扱ったら、精密射撃が出来なくなるぞお？

と言うより、痛い。ジンジンする……。こりゃあタンコブが出来たな……。

「おい、臍。なんだ、あの娘は？ まさか、お前が今回拾ってきた娘、なんて、言わないよな？」

茜は銃身を持ったまま、凶暴な笑みを俺に向けながらストックを
エムへと向ける。後頭部を抑えながら俺は静かに頷く。

『それに何だ、あの顔。織斑千冬と瓜二つじゃないか』

俺と茜は同時に、事務所のソファに座っているエムへ視線を向け
る。察するに難い視線をエムはこちらに向けていた。

織斑……千冬……？　どつかで聞いたことある名前だな。

織斑　千冬……織斑　千冬……織斑　千冬……織斑　千冬。

あれ？　一体どこでその名前を聞いたんだっけ？

確か――

『第一回モンド・グロッソで二位と大差で格闘部門での優勝と総合
優勝を収めた、日本代表のIS操縦者です。格闘部門で刀を模した
近接ブレード一本を巧みに操る姿は、まさに鬼神の様だと、一部で
は言われていて、銃の扱いにも慣れているようですね。射撃の本職
に負けず劣らずの腕前。銃撃部門では、二位と僅差で敗れています』

茜と共に事務所に入った俺が忘却の海から情報をサルベージしよ
うとしている所に、レインが秘匿通信で「織斑　千冬」について紹介
してくれる。

『去年の第二回大会では決勝まで駒を進めたモノの、途中で棄権し
たようです。理由は明かされていません。現在は、日本にあるIS
学園で教師をされているようです』

決勝戦を放棄。理由は明かされてない。随分と愉快な思考を持った女性のようにだ。

「……………」

「…………何だ」

俺がずっとエムの顔を見ていると、エムは不愉快そうに口を開く。

「ふむ……………」

俺は頭の中に朧気に存在していた「織斑 千冬」の顔と、目の前に居る「エム」の顔を照らし合わせる。

「一体なんだ、人の顔をジロジロと」

「あ、いや、別に。なんでもない」…………エムの顔って、そんなに織斑千冬とそっくりか？」

『はあ？』

何言ってるんだ？ 的な顔で俺のことを見てくる茜。エムまで同じような顔で俺を見ている。

『レインも、茜と同じ意見か？』

『ええ、まあ……………』

レインは会ったときから似てると思ってたのか。

『何でその場で言ってくれなかったんだ、レイン』

『あ、いえ……。臃さんがどのような女性とお付き合いしても、私には口出し出来ませんし……』

レインは表情に少し影を作りながら、壮大に勘違いした事を言い出す。

『おい、レイン。俺は別に誰とも付き合っていないぞ。エムと違って別に付き合ってるわけじゃなく、ただ、彼女の探し物を――』

「ただいまあゝ」

俺が最後まで言う前に、眠たげな声で挨拶しながら青年が事務所に入ってくる。

「ご苦労様、真司。首尾の方は？」

さっきまで俺が座っていたソファに腰掛けた茜が聞く。

事務所に来るなり給湯室に入った真司さんが、

「万事抜かりなし。作戦は予定どおりに決行可能」

湯気の立ち上るカップを片手に答える。

匂いから予想するに、俺が入れておいたコーヒーだろう。真司さんはカップを煽って中身を一気に飲みした。ホント、毎度のことながら彼の手腕には度肝を抜かされる。

俺より四、五ほど年上の彼——蒼鳥^{アオトリ} 真司さん^{シンジ}。情報収集、物資調達、隠蔽工作と裏方の重務を、どの仕事もそつなく完璧にこなす。彼無くして、この組織がクライアントからの依頼を遂行することは出来ない。

いつもの2・5枚目の顔は、少し苦めに入れておいたコーヒーを飲んでも眠気が残っているようで、いつも以上にだらしが無い。だが、そんな表情も見人人間が「女性」なら、かっこいい男性の少しだらしない一面と言うギャップ性にそえられるらしい。それが彼の武器だ。

「……………」

「……………」

エムと真司さんの視線が交錯する。エムは真司さんを注意深く観察するように。真司さんはエムを珍獣でも見るような目で。

そして今度はエムの服装を見て、真司さんが仰天する。

「おおおうっ！？ 拘束服！？ なんでこんな可憐な少女が拘束服なんて着てるんだッ！ 誰か理由を知ってる人間はいないか？」

そう、そうなのだ……。エムはまだあの拘束服を着ているのだ。一度は洗濯したから臭いは大丈夫なのだが、袖の血はまだ完全には洗い落とせていない。

え？ そのときの服装はどうしたって？ そんなもの、ジャージを着せたに決まってるだろ？ さすがにエムも色々気にする年頃（見た目年齢）だろうから、全裸は拙い。性的衛生面において、色々

と。

だが、彼女の感性はよくわからない。拘束服の右腕、右足についた三本の革製ベルトをそのまま巻きつけてまとめている。それも大分きつく。まるでそうしないと自分が解けてしまうように。そうすることで姿を保っているかのように。やはり彼女はマゾヒストなのだろうか？

「朧の趣味だ」

「おい、茜、なに出鱈目を――」

「おい朧！ ちょっと話があるッ！ 表にでろいッ！」

「えっ、いや、俺はまだ朝食の途中――」

俺の言葉は耳に入っていないらしい真司さんが俺の首根っこを掴んで事務所の外へと連れ出して、一つ上の階にあるゲストルームに投げ込む。表じゃないのか？

「あたたたたっ、何です、真司さん」

真司さんは神妙な面持ちで後ろ手にゲストルームの鍵をかける。

基本、戦闘には参加しない真司さんは体力があまりないはず。だと言うのに、俺の首根っこを掴んだまま階段を駆け上がった後に一切息を切らしていない。

「おい、朧。彼女は、お前が拾ったのか？」

「そうですよ。……まさか、真司さんまで、彼女が織斑千冬にそっくりとか言いませんよね？」

俺はゲストルームにあるビリヤード台に腰掛けながら、未だに扉から離れようとしない真司さんに問う。

「お前の言い草から察するに残念ながら——なのかな？俺の目から見ても、彼女と織斑千冬は鏡から出て来たみたいにそっくりだ」

だが……、と歯切れ悪く、視線を床に伏せる。

「お前、あの拘束服はどこで手に入れた？」

「どこで、って……。あの拘束服は、彼女が初めから着てたモノですよ。それがどうしたんです？」

嫌な沈黙が俺と真司さんの間で漂う。俺は、事務所に居るエムのこと少し気になるが、真司さんの話しが終わるまでこの部屋から出られそうも無いので、向こうが口を開くのを俺は待つしか出来ない。

「臈……、お前なら気がついてるんじゃないか」

十秒が一分や五分にも感じられるほど濃密な沈黙を経て、やっと真司さんが口を開く。

「……何がです」

「この街の雰囲気急に变化したことさ。立法と無法がコインの裏表みたいに一体なこの街は、もともと治安がよくなかった。だが、

最近は異常と言っているほど、死体がゴロゴロしてる。公安の肝っ玉美人婦警さんが唸っててな。昨日の夜も、鋭利な刃物で両断された死体が五つ転がってたらしい。お前、何か知らないか？」

たぶん、それは、俺だ。それを目の前の青年に告げるべきなのだが、俺は、本当に伝えるべきかどうか迷った。

「……………」

「……まあ、黙るってことはお前の仕業なんだろうな」

人の考えていることをその人の言葉を介さずとも大体わかってしまった真司さんは、面倒くさそうに頭を掻きながら溜息を吐く。

「臍ももう秘密を持ってもおかしくない年頃だ。今年で十七だったか。いや、十八か？ まあ、どっちでもいいや。家族に言えない事の一つや二つ持っても不思議じゃないが、こう言うデカイ事に関しては、せめて俺だけでもいいから相談してくれ」

「すみません……………」

理解ある兄に叱られる弟の気分とは、こんな気持ちなのだろうか。心配してくれている安心感が胸に広がる。

「別に謝って欲しいんじゃない。今度から注意すればいい話だ。で、人を殺すことを大の苦手とするお前さんが、どうしてまた、五人も刻んだんだ？」

「追っ手だったんです、その五人は。それで、撒こうとしたんですけど、一緒にエムが居て」

「エム？ 彼女の名前か。変わってるな。お前がつけたのか？」

「そんなわけないでしょう。彼女が名乗ったんです。彼女、両腕とわき腹に怪我してて。いちお、動く分には問題無いみたいですけど、何分、右腕の傷はその日に出来たもので。処置も擬似皮膚を張るだけで」

「左腕とわき腹、右腕の怪我は同時期に負ったんじゃないのか？」

「左腕とわき腹に関しては、俺が拾ったときには既に。右腕は、昨日、マキナが打ち抜きました」

「マキナが？ 一体どうして？ アイツは確かに、瞬間湯沸かし器並に短気だが……」

ああ、これは正直に言うべきなのか？

俺がエムに押し倒されて殺されそうになった所をマキナに助けられた、なんて。

だが、きつと真司さんの事なので、俺が黙っていても真実に近い答えを感覚的に察するだろうから、ちゃんと話すことにする。

「えーっと、俺がエムに殺されかけたところをマキナに助けられまして……。その時にマキナがエムの右腕を……」

「撃ち抜いたと。なるほど、理解した。それにしても以外だな。マキナが頭を打ち抜かずに腕を撃つなんて」

そう言えば、そうだな。一撃必殺のヘッドショットを得意とするマキナらしくない。腕を撃つなんて。後で聞いてみるか。

「と言うより、お前、最近弛んでないか？」

「そ、そうですか……？」

「ああ。あんな少女に遅れを取るなんてお前らしくないぞ。具合でも悪いのか？」

「俺だって人間ですよ？ 不意打ちを食らえば俺でも押し倒されま
すって」

正直、少し見苦しい言い訳に、真司さんは言葉の真偽を探るように低く唸る。これ以上喋っていると完全に真司さんに会話の流れを持っていかれそうだったので、俺は先手を打つ。

「で、真司さん。拘束服の件くだりからここまで引つ張った理由は何ですか？」

「……………」

「ここまで引つ張っておいて秘密なんて勘弁してくださいよ。夜も眠れなくなりますからね」

「仕方が無い。これはまだ確定情報じゃないから、まだ茜たちには言っなよ？」

そう言っ真司さんは扉から離れて、なぜかビリヤードの準備を始めてしまふ。ビリヤードをやりながら話すつもりらしい。どうや

ら、随分と長い話になるようだ。

ことは、先月。拘束服を着た一人の少女から始まった。筆舌しがたい状態で臃たちの拠点にしている街から少し離れた、車で三時間ほどのところにある町の裏道に死体となって倒れていた。司法解剖の結果、全身には五十発以上の弾丸が撃ち込まれていた。そのせいか、胸骨や頭蓋骨の一部などは粉碎どころの騒ぎではなかったらしい。少女の死体の身元は未だ不明。恐らく、身元は永劫わからないだろう。それぐらい、損傷が激しい。

二つあった足跡。片方は被害者の者とわかった。つまり、犯行は一人で行われたと言うこと。だと言うのに、空薬莢が一つも落ちていない。そのうえ、犯人の目撃情報がない。第一発見者である男性の証言では、けたたましい発砲音を聞きつけて現場に来たときには既に少女の遺体以外は何も残っていなかったと言う。男性が銃声を聞きつけてから現場に到着するまで一分足らず。この事から当局は、犯人像が絞れず、捜査が難航していた。

その事件の一週間後、またしても同じような事件が起こった。被害者は三人。身元はまだわかっていない。今度の犯人の足跡は複数。始めの殺人現場にあった足跡は無い。だが、同じように銃殺されていたことから関係性ありと判断。捜査を進める。

穴だらけの体に残った数少ない血液を検査した結果、どちらも致死量を超える薬品とナノマシンが確認された。薬品に関してはアツプ系の非合法な薬だとわかった。だがそれよりも問題視されたのはナノマシンの方だった。

設定一つでがん細胞を駆逐する医療用ナノマシンが、ある一部の

人種を効率的に殺傷する殺戮兵器にすらなりうる——ナノマシン微細機械。そのため、ナノマシンは非合法な薬以上に厳重な監視と規制が設けられている。国によってはフィルムケース一個分だけでも無許可に他国へ持ち込んだり使用したりすれば、終身刑に匹敵するほど厳しい刑をかせる国もある。

戦争でISを使用することは条約で禁止されている。だが、ナノマシンに関してはまだ、戦争での使用禁止案が通っていない。そこにあるのは、各国のエゴや陰謀が絡んでいるのは明白だった。

そして、少女達の血液に混ざっていたナノマシン、と言うのは、GPS機能の付いた監視タイプだった。高性能GPS機能が搭載されたナノマシンを人体に打ち込む理由として挙げられるのは、行動の監視。これ以外には考えられないだろう。一部政府は、重犯罪を犯した受刑者が釈放後、再び犯罪に走ったとしてもすぐに発見するためにGPSナノを投与すべき、と言う動きもあったが、しかし、一部人権団体がこれを断固として反対。結局、この案は頓挫した。

話しが大分それた。

血で真っ赤に染まった、両手両足に三本ずつの革製のベルトがついた拘束服。それを着ていた少女達の名前は不明。身分がわかるものを一切つけていなかった。顔も損傷が激しく、誰かに見せられるようなモノではない。

当局は少女を銃殺した人間を追うと同時に、彼女達の両親を探している。それと平行してナノマシンと薬を売ったバイアーを追いつめた。

■ ■

「で、居場所までわかってるのに、どうして踏み込まないんですか？」

半ばワンサイドゲームに成りだしたビリヤードを早々に降参してやめ、ビリヤード玉五つを使って安定感あるジャグリングをして見せていた隴は、今度はダーツを一人でやり始めた真司に聞いた。

「まだ話には続きがあるんだ」

アジトも構成員の人数と所在もわかっているのに、どうして踏み込まないんだろうか、と玉が一個追加されてもなお平然とした顔でジャグリングを続ける隴は思う。

確かに、踏み込むための準備は必要だろう。なんと言っても、相手は、少女を蜂の巣に作り変える猟奇的な犯罪集団だ。特殊部隊が出てきてもなんらおかしくはない。

「確かに、バイアーのアジトはすぐに見つかった。でも、問題は、そのアジトなんだ」

真司の言葉を図りかねるように臙は小首をかしげる。

「大型船舶——コンテナ船丸々一隻、そいつらのアジトになってるらしいんだ」

「それはまた……随分と羽振りのいい事で」

呆れるような口ぶりで溜息を吐く。コンテナ船丸一隻がアジトとは、何とも恐れ入った。

「でもな、驚くのはまだ早い。船舶番号を調べた結果な、その船舶は大手会社の持ち物だったらしい」

「大手の会社ほど、裏で何やってるかわからないからなあ」

表面はいいB・B運輸に、たまに仕事を落としてくれる日本の会社『ハヅキ社』がいい例だ。

「で、そこから拘束服へのくだりとどう繋がるんです?」

「察しが悪いな、臙。お前、B・Bによく言われてただろ。『大局を見極める目を養え』——って。体ばかり鍛えてたらダメだぞ?」

「うつ……」

がつくりと肩を落としながらも、ジャグリングは続ける臙だった。

「両腕両足を拘束するための三本ベルト。顔を隠すためにフードと襟元についたファスナー。間違いない。エムの着てる拘束服は、俺が当局で見せてもらったモノと同じだ」

臙はそれだけ聞いて「ふーん」とだけ相槌を打つ。相変わらずビリヤード玉でジャグリングをしてる。地獄に落ちると言う意味で使われる奈落。その奈落を思わせる黒よりも汚れた目は、何かを思案するように薄っすらと閉じられた目蓋によってハイライトが消え、黒を一層際立たせていた。

「随分と反応が薄いな。ここまで聞いて、人殺しが大の苦手なお前は、一体どうするつもりなんだ、臙。利益を欲しない慈善団体の特撮ヒーローみたいに動くのか？」

随分と意地悪な言い方。臙は微苦笑を浮かべる。

「真司さん、俺は別に正義の味方じゃないですよ。むしろ対極——極悪非道、悪逆無道、今世紀最悪の悪人ですよ。人を普通に殺しますし、恐喝だってします。酒やタバコはしませんけど」

苦笑いを浮かべながら自虐する顔は後ろめたさで陰ってはいなかった。

「なら、一つ聞かせてくれ。どうして銃を使わない、蒼鳥 臙」

仄暗く付いた電飾に二つの影が対峙する。一人は、藍色の髪、黒い瞳の少年。もう一人は、栗色の髪、ブラウンの瞳の青年。

臙はビリヤード玉をビリヤード台に戻して、目の前で自分の目を揺ぎ無く見据える年上の青年に少し困ったように微笑みかける。微笑む——と言うよりは、嘲笑。しかし、もしかしたら、嘲笑を向けているのは青年ではなく、青年の瞳に写る自分に向けてだったのかもしれない。

人を殺すことに罪悪を感じない人間は居ない。罪悪を感じない人間が居るとすれば、それはスプラッタ映画の中だ。チェーンソウで四肢を引き裂く。そんなホラーマニアが現実にいるなら、少年は会ってみたいと思っていた。会ってどうするかは、会ってみなくてはわからない。

少年——隴は答える。その口元に涼しげに笑みを浮かべながら。

「銃はお手軽に人を殺せ過ぎますから。それに、殺した——って感触が無くて嫌なんです」

無数の命を刈り取ってきた手を見る。一体どれだけの命を、この手が奪ってきたか。始めは律儀に数えていた。今はもう、数えていない。無駄だと悟ったのだ。

すぐに捕まるだろうと予想して、何人殺した？ と聞かれてすぐに答えられるように数えていた。だが、この生活を始めてそろそろ十年近くになるが、逮捕状はおろか、自分は警察を向かい合ったことすらない。

とは言っても、今でも人を殺すことには抵抗を覚えるし、それなりの覚悟が必要だ。特に、息子や娘がいる親を殺す事は。だが、大抵の人間には家族がある。未婚既婚を問わずに、死んだことを悲しんでくれる人がいる。

銃は、そんな人たちが居る人を殺すときに、重さを全く感じさせない。感覚が無いのだ。鮮明で、生々しい感覚が。人間とは不思議なもので、五感を多く使ったことはなかなか忘れない。形があるものへの思い入れが違う。

青年——真司は言う。その表情を引き締め、真摯に少年と向き合いながら。人を殺すのが嫌いでありながらも、人を殺す彼に向かって。

「そんな甘いことを言っていると、いつか、周りの人間が死ぬぞ？」

■ ■

ゲストルームから出て共に事務所へと戻った俺と真司さんが見たものは、真つ二つに割られた机、砕かれた茶碗、踏み潰されたマイ箸だった。女性二人——エムとマキナは派手に息を切らしながら互いを睨みあっていた。

俺たちはその混沌たるありさまを目の当たりにして、給湯室に非難していたレインと茜を発見した。

「……で、俺が目を放した十分足らずのうちに、一体何があったんだ？」

「私は止めようとしたんですが……」

「まあ、あれだ。犬猿の仲ってことさ」

「それだけで済ませるなよ……」

コーヒーメーカーで作ったらしいコーヒーの入ったカップを片手に茜が説明を始める。

「二人が出て行った後、まあ、売り言葉に買い言葉な会話をしてたんだ、マキナとエムは。それが事の発端」

「つまり、二人とも互いの挑発に乗って喧嘩を始めたよ」

「私もレインも止めたんだがなあ。如何せん、正確がそっくりなせいか、無理だった」

肩を露骨に竦めながら良く似合う溜息を吐いた後、いい香りがこちちまで香ってくるコーヒーを飲む茜。

「でもまあ、喧嘩するほど仲がいいとも言っから、やらせておけばいい」

他人事だと思って……何を言ってるんだ。

また喧嘩が始まったようでガッシャンガッシャン音が聞こえ出す。

これ以上暴れられたら事務所が倒壊するんじゃないか？

俺は給湯室から出て、取っ組み合いをしてる二人の間に割っ
てはいる。

「こらこら、これ以上ここで暴れ回るな、二人とも。エムは特にだ。
アンタ、そんな激しく動いたら傷が開くぞ」

「ふん、この程度の傷、どうと言うことはない」

「嘘吐け。昨日、撃たれたばかりの傷が痛くないはずないだろ。ほ
ら、少し見せてみる」

案の定、袖をあげて見てみると、傷口に貼った擬似皮膚の隙間か
ら少し血が滲み出てる。骨が削られたと言うのに、悲鳴一つ上げず
にここまで良くやるものだ。

「取り合えず、マキナ。アンタは事務所の片付けをしろ」

「はあ〜っ！？　なんで私だけ！　その売女も同罪だろうっ」

「アンタら二人を同じ部屋に入れてたら殴りあい始めるだろうが。
それに、こいつは怪我人だ。それで、怪我させたのはアンタだ」

「ちよいちよいちよい！　ちよい待ち！　待てよ、そりやないぜ。
私はお前を助けたんだぞ？」

「あゝ、そう言えばそうだったな。じゃあ、事務所の掃除がんばっ
てくれ」

俺はエムの手を握って事務所から出る。事務所の中から不満が爆発したマキナがモノに八つ当たりする音が聞こえたが無視。マイ箸を折られた恨みだ。

「よくもまあ、こうなるまで暴れたもんだ。アンタ、痛くないのか？」

事務所から少し離れた場所にある駐車場に止めている車の中で、俺は医療パックを開けて擬似皮膚を重ねて貼る。

弾丸一発分綺麗に削られている、と昨日レインは言っていた。普通だったらその場で泣き喚いてのた打ち回ってもおかしくない大怪我を負ったはずなのに、目の前でムスツツとしているエムは泣き言一つ言わず、涙一つ浮かべず、その場にいた俺やレイン、マキナを睨みつけた。いくら最近のナノマシンが優秀だからといっても、骨が削られる痛みを一瞬で感じなくさせるほど強力な麻酔はない。

「この程度、何ともない。私はお前達とは違う」

「まあ、俺もアンタも違う人間であることは、間違いないな」

「上げてもない揚げ足を取って何が楽しい」

「楽しいぞ、結構」

相手によっては今のエムみたいに眉間にシワを寄せるが。

にしても、エムの顔ってそんなに織斑千冬に似てるか？

いつも人を睨んでるようにしか見えない、ちょっとつり目の黒い

瞳。耳が隠れるくらいまで伸びてる漆黒の髪。色素の少し薄めな唇なんて結構俺好み。

ふむ……、似てる………のか？

「……それで、お前はいつまで私の腕を掴んでいるつもりだ」

「ああ、すまん」

俺はエムの手を離す。エムは傷口の状態を確かめるように腕を動かす。

華奢な腕だった。白魚のように白くて、力を加えれば簡単に折れそうに細い。ナイフや銃を握らせるよりもピアノやヴァイオリンを弾かせたくなる細く美しい指。

こんな子が、一体どうして――

「……なんだ、人の顔をジロジロ見て」

「あ、いや、何でもない」

「そうか。なら、早く行くぞ」

「行くってどこに？」

「決まってるだろう。私のロケット探しだ」

そう言えばそうだった。忘れてたな。完全に。俺とエムはコートを取りに一度事務所に戻った。

ロケットペンダント。チャームが開閉式になっていて中に写真や薬などが入れられるようになっていたペンダント。中身の写真は家族写真か彼氏彼女が多い。最近では携帯電話の待ち受けにそう言う写真登録する人間が主流になってる中、エムのようにちゃんと実物で持っている人間は少ない。

だからだろう。思い入れが強いのは。形として残して置けるものに強い執着を持つことは間々あることだ。形があるのと無いのとは、人間はなぜか思い入れの度合いが違った。

コートの内側——ベルトにかけてあるナイフホルダーに手が伸びる。コート越し、ホルダー越しからでもわかる形。二股に割れた大型ナイフ。柄頭に開いた穴にワイヤーを引っ掛けて投げて使うことも可能。切れ味は材質関係なく紙を切るように切れる。

B・Bの形見。俺は正直、これをあまり使いたくない。これは、反則的強さを持った武器だ。正確には武器——ではない。兵器だ。戦争で使われるミサイルや戦車、戦闘機に空母。その手の類に部類されるものだ。

それぐらに、この『ナイフ』は危険な代物だ。使い方次第で何でも出来る。フォークリフトのように重い物資を持ち上げること、二千三百四十一発のミサイルを全て打ち落とすことも、俺の扱い次第では可能だ。

どうしてこんな代物をB・Bが持っていたのか甚だ疑問ではあるが、彼女が居ない今となってしまえば、その答えは誰も示してはくれない……。

俺とエムはぎゃんぎゃんと騒ぎ立てるマキナを茜とレインに任せ、車を使つて薄っすらと潮風漂う港へと向かった。

「で、……………どうして港なんだ」

近くの駐車場に車を止めた後、人がまばらに居る港の方を歩いていたときから同じ質問を繰り返していたエム。振り返ってみると、相も変わらず仏頂面だった。

「いやあ、いつもいつも臭い路地裏ばかりじゃあ飽きると思ってちよつと気分転換に寄ってみたんだが、気に入らなかったか？」

「そんなことしてる暇なんて無い」

「そんな肩肘張つてても、見つけたいものは見つからないぞ。ふむ……………そうだなあ……………。エム、たまには空を見てみたらどうだ？ それで、動物に似た雲を探すんだ。落ち着くぞあ」

「だからそんな暇は無いと言つてゐる。とつとと戻るぞ」

そう言つて少々時化した海を少し見てとつと車の方へ歩いていつてしまった。

あゝああ、残念。少しはリラックスさせようと思つて海に連れて来たんだが、効果はいまひとつか。

甲高い車のクラクションを鳴らして、俺に早く戻ってくるよう催促してる、どこか近寄りがたい雰囲気を自分からわざと発して、どこか他人と一線画したがっているエムのような人間が、リラックスする時間を削つてまで探し出したいもの……………。

少し、興味があつた。

1 - 10 (前書き)

更新、おひさー。今週先週とテスト勉強でPCにすら触っていなかった水屋の娘は美しいと思っている作者だよ。

ホント、久しぶりにPC立ち上げて評価を見てみたら落ちてる落ちてる(笑)

まあ、しゃあない。投降してなかったんだもん。うん。

と言っわけで、第十話、どうぞ。

（あゝ、首がいてえー……）

俺は姿勢を起こして大きく伸びをする。首を左右に動かすと小気味良く音がした。ジャケットの袖をどけて時計を見てみると正午少し過ぎたところだ。昼ごはんには丁度いい。

朝食を食べ終えた俺とエムは、俺がエムを担いで運んだルートのロケット搜索三週目を行っていた。ふと、エムの方を見ると、しゃがんでゴミ袋の下を念入りに探っていた。

すごい執着心だ。体力には自信があつたのだが、合い間合い間に休憩を挟まずに探しているエムを見ると、その自信が井の中の蛙であつたことを自覚せねばなるまい。

「エム、そろそろ昼にしないか？」

「……もうそんな時間か」

「正午少し過ぎたところだ。搜索は昼メシを食った後にまたやろう」

「わかった」

そう言つて立ち上がり伸びをする。

「それで、今日はどうするんだ」

小汚い裏道を出て街道に出るとフードを被ったエムが尋ねた。

「そうだなあ……。事務所まで行ってメシ食べた後にまたここに戻ってくるのは手間だから、どっかの店で何か買うか」

「効率を考えたらそれが一番いい」

「効率……かあ。エム、そんな事ばかり考えていると、頭が貧困になっちまうぞ？ もっと無駄な事して発想をユニークにしないと」

「効率を重視して何が悪い。無駄を省くことの何が悪い」

「いや、悪いなんて言っていないんだが——」

「そもそも、お前に私の価値観をとやかく言われる筋合いは無い」

「まあ、確かに」

出すぎたマネだったな。

「あれ？ 臃？」

どこか美味そうな店がないか道を歩いていると、道路の向こうから名前を呼ばれた気がした。

そっちに視線を向けた。

「あつ、やっぱり臃だ。おーいつ、おゝぼろゝおー！」

俺はついつい視線をそらしてしまった。こんな真昼間の街道で道路の向こう側に仕事仲間を見つけたからって、そんな大声で名前を

呼ぶか、普通……。

「おい、臃。呼ばれてるぞ」

「ああ、知ってる。エム、何か食べたいモノはあるか？」

「私は何でも構わない。好き嫌いは無いからな」

うむ、嫌いな食べ物が無いのはいいことだ。

「ねえ、無視！？　ちよつ、無視なの、臃！？」

「おい、呼ばれてるぞ。いいのか、放っておいて」

「いい、放っておいて」

「ちよつと、無視しないでよ」

「おい、あいつ、こっちに手振ってるぞ」

「いい、放っておけ」

「ねえ！？　本気で無視なの！　無視するのッ！」

「おい、あいつ、怒ってこっちに走ってきたぞ」

「いい、放っておけ」

「無視かコラーッ！　臃オオオオ——」

『プウウウウッ！！！』

『ガッシャーン！』

「おい、あいつ、トラックに跳ね飛ばされたぞ」

「いい、放っておけ。アイツはトラックで轢かれたくらいじゃあ死なないから。コンボイに轢かれたらどうなるか知らんが」

「あいつ、人間なのか……」

「いいや、サイボーグ全身義体だ。サイボーグ0。9だ」

「おい、と言うことはあいつは加速装置が使えるのか！？」

「ああ。段階式に加速を上げることが可能で、最大加速マッ八五で走ることが出来る」

「随分とハイスペックな人間だな。いや、マッ八五で走れる人間を、人間って言うていいのか………？」

「信じてるよ……。エムのヤツ、信じちゃってるよ……。まあ、サイボーグと言う点はあながち嘘でもないのだが。」

「へへ〜ン♪ そうでしょう？ すごいでしょう。何を隠そう、この咲ちゃん！ 陸上競技ならどんな人間にも負けない脚を持っているのだ！」

横から声がした。

ビクンとエムが体を大きく震わせて俺の後ろに隠れた。俺はいざと言うときの楯か。

「おい、咲。そうやってぬつと現れるのやめろ。エムが驚いてるだろ」

周囲の人間も込みで。

「さんざ人のこと無視して、あまつさえ交通事故の瞬間を目の当たりにしておきながら救急車すら呼ばない人間の言う台詞とは思えないよ、臍。酷いよ。死ぬほど痛かったんだよ、トラックに轢かれるの」

「そうか、それは災難だったな。だが、咲。思い出してみるんだ。左右を確認せずに、道路に無防備に飛び出したのは誰だ？ アンタだろ？ つまり、自己責任と言うことだ。俺やエムに怒りの矛先を向けるのはお門違いと言うヤツだ。と言うわけでさよなら」

「チヨ————ッと待ったアアアアア！」

相変わらず騒がしいヤツ。俺は溜息を吐いた。

「今度は何だ？」

「臍、お昼まだでしょ？」

「ああ、まあ」

「この間、新しく出来たモールがあるんだけど、その中にさ、ちよー美味しいティック・ヌードル出す店があるのですよ。一緒に行

かない？」

「お、いいな、それ。エムもそれでいいか？」

「人ごみはいやだ」

やっぱり、言うと思ったよ。

咲はフードを深く被ったエムの前に立って、視線を同じ高さにするために、少し膝を折った。

まるで服を選ぶときのように難しい顔をしながら、エムの顔を見る。エムはジロジロと顔を見てくる咲を鬱陶しそうに睨む。

「……何だ」

「ねえ、臍。この子、誰？ まさか！ 私の知らないところで愛人と作った子どもかッ！？」

なんでそうなる……。

「茜から聞いてないか？ 俺が拾った子どもだよ。名前はエム」

「エム？ マゾヒストなの？ ああ、なるほど。だからコートの下に拘束服なんて着せてるんだ」

中に来ている拘束服が見えないようにコートの前をちゃんと閉めていたにもかかわらず、ぴたりと言い当てた咲に、エムは警戒の色を強める。

「言っておくが、俺の趣味じゃないからな」

「だよね。臍、そう言うプレイ嫌いだし。じゃあ、この子が趣味で着てるの？」

「まあ、そうなんじゃないのか？」

「へえ」

そう言っただけは、エムの爪先から頭の先まで、嘗め回すように視線を何度も往復させる。

そして唐突に両腕を前に突き出した。咲の手はエムの胸を驚づかみにした。

「——ッ!？」

「おっ、いい。いい揉み具合ジャマイカ。ちょっと小振りだけどその小ささが逆にいい! こう……片手に収まって、支配してる! って感じが出て最高う」

やりやがった……………。

「はうわあ……ッ!!! よく見たら、やっぱりお顔もプリチーじゃなイカ!? どれどれ、もっとお顔をよく見せて御覧なさいな」

何の前振りも無く胸を揉まれて顔を赤くしているエムのわなわなと震える手を思い切り引っ張って、咲が横から抱きフールドを脱がせ顔に頬ずりを始めた。

「ん……？ でも待て……。この弾力は――！」

「ふぁっツ！？」

右の胸を掴んでいる左手を世話しなく動かしながら、咲は驚愕の表情を浮かべた。

「ま、まままつ、まさか！？ まさかまさかツツツ！！ ノーブラッ！？」

公然のど真ん中でそんな事を大声で口走った咲は、エムの着ているコートの下へと左手を滑らせる。右胸の辺りで、まるでミミズがのた打ち回っているようにコートの影が激しく動き始めた。

「ああ………や、やめっ………」

頬が薄っすらもみじ色に染まり始めたエムが、熱を帯びた息を吐き始めた。

………咲、初めからエンジン掛かりすぎだろ。

「や、やはり、ノーブラ……。くう……や、やるな。ノーブラ拘束服と言うライトノベルでも滅多にお目にかかれない奇抜な組み合わせで私の臍を箆絡しようと言う魂胆かッ！？」

「おい、誰の俺だって？」

「だううあああああaga！ そうは問屋があっあああああうおおおおおろさないiiiiiiiッ！ 私のアあああああああ

あグレッシブかつハあああああド・ええええンド・ソおおおお
おおフトなテええええクニツクでえええええええええええええええつ、極
楽浄土への片道切符をプレゼントフオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ウウウウウッ！」

そう言ってエムの後ろに回りこみ、エムを後ろから抱きしめるよ
うにして、左右の手をコートの下へと滑り込ませ左手で右胸、右手
で左胸を揉みはじめた。

「ちょっ……み、見てないで、た……たすけ………ひゃう!？」

「ほうほう、君は乳首ちゃんが苦手な典型的いじられキャラなので
すね。なら焦らしに焦らした後でゆっくりとボイルドしてあげまし
よう」

「ちょ………た、助けて……」

頬を染めながら目尻に薄っすらと涙を浮かべたエムが、文字通り
泣きすぎるような声を出して助けを求めてきた。

「……………」

俺はあえて傍観を決め込むことにした。ポケットに入っていた飴
玉を包みから出して口に放り込み、少女二人が公衆の面前でまぐわ
っている光景を、最前列で観賞する。いつの間にか、二人の周り
には見物客が円をなしていた。俺は野次馬の最前列まで下がる。

えっ？　なんで傍観を決め込むかって？　そりゃあ、ねえ。美少
女二人がくんずぼぐれつしてるなんて光景、滅多にお目にかかれな
いから。まあ、目の保養？

「なあ、アンタ」

俺が最前列で座り込みながら見てみると、後ろにいた若い兄ちゃんが俺に耳打ちしてくる。

「あの二人の飼クライアントい主か？」

「まあ、雇クライアントい主ではある」

「いくらでやれる？」

はあ、ホント、この辺も随分と変わったなあ。この手のやかからが増えたというか。何ともはや。世も末だな。

「いくら払える？」

「あの桃色の髪の子、いくら？」

「九千万ドル」

「なっ!？」

俺の提示した値段に驚き立ち上がる。彼は再び俺の後ろにしゃがみこんだ。

「じよ、冗談、だよな？　ゼロが三つや四つ、多い気がするんだが……」

「真剣だ」

と言うか察してくれよ。冗談を。ホントは売る気が無いって。

「ふふふつ、さて、そろそろ下の方も頂いちゃいますかぁ？」

ホント、エンジン掛かりすぎだつて……咲ちゃん。右手はエムを逃がさないように胸を掴んで、コートの中に入っている左手が腕、肘、二の腕と入っていく。

……そろそろ止めないとまずいよな。

俺はゆっくり立ち上がり、はぁはぁと溜息の発作を起こしている咲の後ろに回って後頭部を叩く。

「ちょ、いったゝ。邪魔しないでよ、臃」

「やりすぎだ、馬鹿。少しは場をわきまえろ」

そう言っただけの間にか自分達を取り囲んでいた人、人、人を見て、咲は顔を赤くした。

咲は俺の耳元で小さな声で講義する。

「なんで止めてくれなかったの！」

何で俺が怒られなきゃいけない……………。

「取り合えず、ここを離れよう。ほら、エム。行くぞ」

そう言っただけエムの方を見たら、膝を内側にして脚をペタンと地面

につけて座っていた。

ま、まさか……………。

脳裏にそんな考えが一瞬過ぎったが、腰が抜けているらしいエムを担ぎ上げて全力疾走して人ごみから退散するほうが先だった。

俺はエムを掻っ攫い人ごみの一箇所を蹴散らして逃走した。

建物と建物の間を縫うようにして路地裏に入ったところで、心ここにあらず状態のエムを下ろし、十分も走っていないと言うのに息切れしている咲を詰問する。

「おい、咲。アンタ、まさか——」

「いやあ、エムちゃん、結構感じやすいね♪ 軽く行っちゃったよ。ごちそうさまでした」

「鼻血を拭きながら親指をドヤ顔でこっちに向けるな」

「ハハハッ！ 見たか！ これが咲ちゃんの爆裂ツツッ！ ゴッ。フィンガーだッ！ たとえ素人だろうが熟女だろうが、咲ちゃんの手にかかれば数秒と持たずに絶頂を迎える！」

激しくうねったり、左右に動いたり、指の一本一本が全く別々の動きをしてやる……………。相変わらず、人間離れした指の動きだ。

「じゃあ、メインディッシュを頂戴しようかな」

そう行って両手をワキワキとさせながらこっちに迫ってくる。

「さあっ！ その童貞を私によこせええええ！」

バツ！ 咲が地面を蹴ってルパン。イブした音。

ガシッ！ 俺の手が咲の頭を掴んだ音。

ガツンッ！ 咲の後頭部が建物の壁にぶつかった音。

ガツンッ！ 咲の後頭部が建物の壁に亀裂を走らせながらぶつかった音。

ガツンッ！ 咲の後頭部が建物の壁にさらに亀裂を走らせながらぶつかった音。

ガツンッ！ 咲の後頭部が建物の壁にさらに、より一層亀裂を走らせながらぶつかった音。

ガツンッ！ 咲の後頭部が建物の壁にさらに、より一層力強く亀裂を走らせながらぶつかった音。

ガツンッ！ 咲の後頭部が建物の壁にさらに、より一層強く、スーパーに亀裂を走らせながらぶつかった音。

ガツンッ！ 咲の後頭部が建物の壁にさらに、より一層強く、スーパープレミアムに亀裂を走らせながらぶつかった音。

ガツンッ！ 咲の後頭部が建物の壁にさらに、より一層強く、スーパープレミアムエキサイティングに亀裂を走らせながらぶつかった音。

ガツンッ！ ガツンッ！ ガツンッ！ 咲の後頭部が建物の壁に――（面倒なので以下略）

「ちょ！？ やめてッ！ もうやめて！ 咲ちゃんのライフはもうゼロよ！――！」

「――返事がある。ただの人間のような。よって続行」

「ごめんッ！ ゴメンナサイッ！ もうしないから許して！ さっきから後頭部がねっとりしてるの！」

「大丈夫だ、問題ない。それはただの血だ」

「大丈夫じゃない！ 問題あるよ！？ ごめん、ごめんなさいッ！ 後でビルの上からジャンピング土下座するから」

「だめだ。それじゃあアンタが死なない」

「殺す気だったの！？」

「モチロンサア。ドナ。ドはつい殺^やっちゃうんだ（ドヤッ）」

「感じが違う！ 漢字が違うよ！ 殺らないで！ 朧が言うところリアルに聞こえるから！ 私、まだやり残したことがあるのっ！ だから命だけは――あ」

「いいだろう。俺も鬼じゃない。一つだけ望みを叶えてやる」

「朧の童貞頂戴――ッ」

「さて、確かこの近くに石灰粉を作る工場があったはずだ。その粉碎機の中で岩と一緒にミックスされてみるか？」

「ホント、マジでスミマセンでした」

俺の手からするりと抜けた咲が即座に土下座した。まあ、ゆるしてやろう。

「ほら、エム。メシ食いに行くぞ。咲が奢ってくれるから好きなだけ食っていいぞ」

「えー、私、臍に奢ってもらおうかと思ったのに。二週間前の日本での依頼でお金入ってるでしょ？」

「あれはしくじったから前金しかもらってない」

「えっ？ 臍がしくじったの！？ めっずらしい。そんな面倒な相手だったの？」

「あゝ、面倒だった。だからしくじったんだ」

「ふーん。なら今月厳しくない？ 二人分の食費で」

確かに、今月はエムの分の食費が追加されて少々きつい。給料日まで持つかギリギリだ。

「なら、仕方が無い。咲ちゃんが自分の含めて三人前、出してあげよう。これで貸し一だからね」

「ああ、恩に着る」

こいつに貸しを作るのはぞつとしないが仕方ない。二人分の食費が浮いたと思うことにするか。

その後、何とか持ち直したエムと共に、一度別ルートで街道に出た。エムは、咲を警戒しつつ放しだった。あんなことをされれば当たり前だ。二人は俺を挟むようにして歩いている。左手にエム、右手に咲だ。

ランチタイムと言うこともあって少し騒がしい街道に出てすぐ、咲は俺の腕に寄り添う形で身を寄せ、腕を絡めてきた。

「咲、そこまでくっつかれると……少し、歩きにくいんだが」

「えゝ、いいじゃん。減るもんじゃないし」

「そりゃあ減らないが、歩きにくいんだ」

「……………こんな美少女と腕を組んでるのに、出てくる感想はそれですか」

……………いや、自分で言うなよ。

「男性は女の子をエスコートする義務があるので〜す」

「だれがそんなこと決めたんだよ」

「え〜、一般常識だよ。シエントルマンレディ紳士が淑女をエスコートするのは。臆ってばひじょうしきだなあ〜」

じゃあ俺は今日、咲みたいなじやじゃ馬と、エムみたいな暴れ馬の二頭を相手にしなきゃいけないわけか………………。気が遠くなる。

「それで、その店はここから近いんだよな？」

「トレインで十五分ぐらい。そこからすぐモールだから、そう遠くは無いはず」

十五分か……。

俺はエムを見て少し考えた。

「なあ、エムはそれでいいか？」

「身近な場所で済ませたい」

言うと思った……。ロケットを探すために近場で食事を済ませようと言うのに、十五分はエムにとっては大きく時間を無駄にしていることになる。往復するから十五分じゃなくて三十分か。

そんな無駄をエムが承知するはずが無かった。

「えゝ、行こうよ、エムエムう」

「え、エムエム……」

随分安易なニツクネームのつけかただな。同じ言葉を重ねるとか。

「エムエムはなんで行きたくないの？」

「……時間の無駄だ。なんで近くで済ませない」

「そりゃあ、食べたいからに決まってるでしょう。美味しい物食べると元気になるでしょ？　これからがんばろーって気にならない？」

「ならない」

「えゝ、なるよ」

「ならない」

「なるうつ」

「ならない」

二人して言い争いを始めてしまった。別に言い争うことではないだろうに……。あゝ、腹減った。

「なら、民主的に多数決で決めようか。今のところ、一対一。臍にどっちがいいか決めてもらう。それでどう？」

「いいのか、結果は火を見るより明らかだぞ」

「奇遇。私も、手に取るように分かるわ。で、臍」

「はい？」

「どっちがいい。近場で済ませるか、こいつのすすめる店に行くか」

「……………」

「どっちでも、と言う選択しは、この場合無しだよな。」

「ふむ、どうしたものか。」

「と、俺はそこでひらめいた。」

「なあ、咲。その店って確か、モールの中にあるって言うてたよな？」

「うん。モール内の出店だから」

「オーケー、じゃあ、モールに行こう」

「なっ!？」

「許せエム。これも俺のためだ……」。

「ヤッフーツ! 二対一で咲ちゃんウイン! じゃあ、行こうか」

「私は行かない。行かないからな。時間の無駄だ」

「駄々をこねるなよエム。多数決で決まったんだから大人しく行こう。電車代は俺が出してやるから」

「そう言う問題じゃない。私には目的がある。一分一秒が惜しいんだ。なのに、近場で済ませればいいものを、なんでわざわざ電車で少し行ったところの出店まで行かなくていいけない。私はいかないからな」

頑固だ。とてつもなく頑固だ。いや、我がままと言うのか、こう言うのは。

だが残念な事に、その駄々に付き合っただけでいいとすることはできないのであった。

「はあ、エム。アンタがこれ以上駄々をこねるなら、俺は切り札を早々に切るが構わないか？」

「ああ、好きにしろ。お前がどんな手を講じてても、私は考えを変えらるつもりは無い」

「オーケー。よし、咲。エムを好きにしていぞ。胸を揉みしだくなり、お持ち帰りして抱き枕代わりにするなり、好きにしろ」

「えっ！？ ホントッ！ 好きにしていぞ！？」

「ああ、好きにしていぞ。煮るなり、焼くなり。あんなプレ——」

「よし、行くか。そのモールに。おい、何してる臍。早く行くぞ」

エムのヤツ、咲が目を輝かせて手をわきわきさせるの見て身の危険を察したな。あの一瞬であんなに先まで行ってる。

ふむ、エムのコントロールには今後、咲を引き合いに出すか。俺は切り札を手に入れた。

「それじゃあ、行くか。……………って、咲はどこ行つた？」

「はうあああああああつ！ エムちゃーん！」

声のする方を見ると、咲がエムに向かって飛び込んでいた。

「のはっ！？」

「ぐへへ、もう離さないよエムちゃんや。臍からの許可も出たし、今日から君は私の嫁なんだよ。ああ、この抱き心地、ホント、さいこぉ〜」

ゲヒゲヒ言いながら涎を垂らしそうなほど口元を緩めた咲は、早速エムを弄り始めた。体のいろんな所を触ったり、うなじの部分を舐めたり。そのたびにエムは、色っぽい息を吐いていた。

二人とも、人の目なんてもうどうでもよさ気だった。

1-11 (前書き)

はーい、久しぶりの方はお久しぶりで す！

イヤゝすまんね、亀更新で。

おじさんもがんばってるんだね、如何せん筆が進まないんだよ。

じゃあ、ISⅡ誰がための銃痕Ⅱ 第11話、始まるよ♪

「ごちそうさま。水持ってくるわ」

「ん、ありがとう」

咲お勧めの店でティック・ヌードルを食べ終えた俺は、セルフサービスカウンター・タンクの所に行き三人分の水を汲む。

赤いチャーリー・ソースをたっぷりかけ、ゆでた野菜やイカが入ったティック・ヌードル。俺はそれに、魚のすり身を油であげたものと、魚を南蛮風に味付けしたものを乗せてもらった。思いのほかうまかった。

ここに来るまでさんざ文句をたれていたエムも、店から香る香ばしい匂いで大人しくなった。昼時ともあって少し並んだのだが、空腹に美味そうな匂いが響いたらしく、エムは並んでいるときにPDAでもらったメニューを見ながら目を輝かせていた。

「ほい、水」

「どうも」

「……」

二人して水を一気に飲み干した。

「さて、これからどうしようかな。咲はどうするつもりなんだ。わざわざこれを食べうためにここに来たわけじゃないだろ？」

「うん、まあね。服を新しく買おうかなと思ってたりする」

また服か。こいつ、俺が日本に行く前もそんなこと言ってたか？

だが、これは好都合。

俺は懷から財布を取り出して札を数枚、咲の前に置いた。

「ん？ このお金なに？」

「咲、アンタに折り入って頼みがある」

「折り入って頼み？ 臃が私に？ めっずらし〜。明日は隕石でも降って来るかもしれないね」

随分な言われようだな……………。

「この金で、エムに服を買ってやってくれないか？」

「服？」

「はっ？ ちょっと待て、臃。お前、一体何を言ってる」

「何って決まってるだろう。俺じゃあ女性の好みも、審美眼もないから、咲にこうやって頼んでるんだ。アンタも、いつまでも拘束服じゃ何かと不便だろ」

と言うより、隣に拘束服を着ている女の子を連れている俺の精神

状態がもついろんな意味で限界……………。

「余計なお世話だと言ってる。服なんて買わなくてもいい」

「別に、アンタのためじゃない。俺のためだ。隣に拘束服を着た女の子が居るのは些か落ち着かないんだよ」

「咲ちゃん的には、別にそのままでもオーケーなんだけどなあ。むしろ継続を希望？」

「アンタの意見は聞いてない。と言うわけだ、俺が金を出してやるから、咲と一緒に服を買って来い」

「却下だ。なんで私がお前の命令を聞かなきゃいけない」

「ほう……。そんな反抗的な態度を取っていいのかな？」

俺は頬杖を付いてエムに笑みを向ける。超満面の笑みだ。そして、その視線をゆつくりと咲に向けた。

エムも俺が何を言いたいかわかったようで、若干冷や汗をかいているように見受けられる。

俺は再び視線をエムに戻し訊いた。

「返事は？」

「……わかった。買ってくればいいんだろ、買ってくれば」

エムは諸手を挙げて降参といった具合に溜息をついた。

予想以上に咲効果高いな……。俺はいい切り札を手に入れた。

「じゃあ、俺は少しその辺ぶらついてるわ」

「ちょっと待て！」

俺がコップの中の水を飲み干し椅子から立ち上がると、大分慌てた様子でエムがコートの袖を掴んできた。

「なんだ？」

「こいつと二人っきりで買い物に行けと、お前は言うのか」

「女性二人の方が何かと気にしなくていいと思つての配慮だったんだが」

「いい、気にしなくて。だから、こいつと二人っきりだけはやめてくれ。本当に、それだけは勘弁してくれ。服はちゃんと買うから」

「ひつどーい、そんなに咲ちゃんと二人っきりがいやなの？」

「当たり前だ！ 誰が好き好んで急に抱きついてくるやつと二人っきりで買い物なんかしなきゃいけない！」

「大丈夫だよ。咲ちゃんだって子どもじゃないんだし、さすがに人の目がある中で急に抱きついて、おっぱい揉んだり、首筋舐めたり、耳にふー、なんてしないよ」

説得力無さ過ぎるな。咲が言ったその三つ、ここに来る前に乗った電車の中でやってたし。

「頼む。こいつと二人だけは本当にやめてくれ……」

懇願する眼差しを俺に向けながら、エムは手の平を合わせて俺を拝む。

アンタ、性格変わってないか……………。

「随分と嫌われているようだな、咲」

「むっつ、臃がエムエムに変な事吹き込むから、エムエムが咲ちゃんに予防線張っちゃうんでしょうが。ちよつとは反省してよね」

「反省つて、一体何を反省すればいいんだか。俺には思い当たるところがこれっぽっちも無いな」

「それ、わかってて言うてるでしょ。意地悪だなあ、臃。でも、それってあれだよな。気になる女の子に意地悪する男の子の心境ってヤツだよな。なっんだ、臃も意外と可愛いところあるじゃん」

「それじゃあ行くか、エム。道案内ぐらいは出来ると思うから、服はアンタの好みで買ってくれ」

「初めからお前に服のセンスは期待していない」

それは何より。仮にも「これ、似合うか？」なんて聞かれたらなんて答えればいいかわからないからな。

「ちよっ！？ 置いてかないでよ二人ともーッ！ー！」

■ ■ ■

その日、トールキンは、裏道にて、部下二名を連れて、逃げた被検体を捕獲、ないしは抹殺を行っていた。

手に持っているPDAには、被検体たちにあらかじめ注射してあったGPS機能付きナノマシンから送られてくる、位置座標が三つ、点滅していた。一個は彼らのすぐ近くにあった。本当なら四つほど点滅していないといけないのだが、どうしてか彼女の反応だけ消えていた。

トールキンは、捜索班を三手に分けて一人ずつマーキングしていくことにした。これが彼の常の作戦だ。見つけてもすぐには手出しせず、ターゲットを中心に前後左右へ人を配置して尾行し、寝床まで後をつける。そして、草木も眠る丑三つ時に完成したく狩人>を使ってことを済ませる。

だが、エム——トールキンは、彼女が『織斑千冬』だと上から教えられている——の件に限って言えば、手を変えた。交渉に。正直な話、トールキン、ひいてはトールキンの所属する組織は、『B・B運輸』をなるべくなら敵に回したくは無かった。

構成員の人数を考えたとき、トールキンの所属している組織は圧倒的に『B・B運輸』に勝っている。

だが、個々の質を考慮に入れたとき、そして、そこから今動かせる人数を考えたとき、『B・B運輸』とのいざこざは避けたかった。それでも宣戦布告したのは、なんとしても、被検体を、生きたまま、人目に触れさせるわけには行かなかったからだ。

『B・B運輸』——構成員人数二十人強、平均年齢二十歳前後。小さく、幼い組織といえよう。しかし、そんな彼らがどうして、この地で八年近くも生き残っていられたか。それはひとえに、創設者の構成員指導の賜物と言えよう。

『B・B運輸』創設者、B・B。見た目年齢は二十歳前後。彼女もまた大分若い。正確な年齢は誰も知らない。危険な仕事をさせておくには勿体無い美人であることは確かである。紺色の髪を後頭部に結い、常に何か口の中に入れていた。飴とか、ガムとか、スルメイカとか。

得物は誰も見たことの無い自動式拳銃二挺。ガバメントのように重々しい雰囲気ながらも、そのシャープなフォルムはベレッタ“ストーム”と同じようにおうとつが少ない、恐らくは、彼女オリジナルの銃。オンリーワンの、特注品。

事実か否かはさておき、そんな彼女には、ある種都市伝説といってもいい、武勇伝があった。

曰く、相手が打ち出した弾丸を自分が打ち出した弾丸で迎撃する

ことが出来る。

曰く、中東で幅を利かせていたテログループを半刻もせず一人だけで壊滅させたことがある。

曰く、元I Sの国家代表。

曰く、現役時代は、あの『織斑 千冬』を凌ぐほどのI Sの使い手だった。

曰く、『織斑 千冬』を一から叩き上げた師匠。

どれも真偽のほどは不明であるが、このような噂が彼女を見なくなって一年ちよつとたった今でも、彼の耳に入ってくる。

そんな彼女に訓練された構成員は、人数は少なくとも、優秀だった。非情にも。少数精鋭の部隊。現在の指揮官である蒼鳥アオトリ 茜アカネを頭脳に、『B・B運輸』は一人、ないしは一匹の生き物として機能していた。

その中でももっとも厄介とされているのが、エムを拾った青年である。『B・B運輸』の實質上のエース、蒼鳥アオトリ 臃オボロ。彼は、一番長く、B・Bと一緒に居た。その訓練期間は、他のメンバーよりも長く、色濃くB・Bの教えを受け継いでいる。

次に、後方支援として動くことが多い、蒼鳥^{アトリ} レイン。彼女の特筆すべき点は、純粹にその狙撃能力の高さだ。どう言う訳か彼女は場所を殆ど選ばずにターゲットを打ち抜ける。彼女に必要なものはターゲットに届く銃と弾丸だけ。観測手も、風を事前に調査するこ
ともしない。

三番目に、組織の指揮官^{ヘッド}である、蒼鳥^{アトリ} 茜^{アカネ}だ。レインほどでは無いが、彼女も狙撃能力が高い。指揮官として中々前線にあがって
ることがない彼女だが、頭の回転は人一倍速く、誰も思いつかない
ような攻め方で敵を翻弄する。

最後が、一番槍を勤めることが多い、蒼鳥^{アトリ} 咲^{サキ}だった。彼女がある意味、あの組織の中では一番の曲者だ、とトールキンは思った。
なぜか。彼女が、鉛弾が行きかう鉄火場で、手甲とつぶてを武器に、
馬鹿みたいな怪力と人知を超える強運を兼ね備えていることだ。

強運——そうとしか説明しようが無いと、その光景を目の当たり
にした部下の報告書を読み終え、その部下を呼び出し報告書に書か
れていた馬鹿げた内容の詳細を聞いたところ、そう、言ったのだ。
手甲をつけて軽快な足さばきで距離を詰める彼女に向かって撃った
弾丸は、まるで、そこに見えない流れでもあるかのように、不自然
に弾道が湾曲し、彼女を避けて後ろへ流れる、と。

トールキンは正直、耳を疑った。そんな馬鹿げたことがあるはず
がないと。今でも何かの見間違いだと思っている。用心に越したこ
とは無いと言う訳で、警戒はしておく。それが彼の強みだ。現実的
にありえないことが報告されたとしても、それに対しての対策を怠
らない。

それ以外は、今の手札であれば、有象無象で片付けていい連中ば

かりだ。今、出払っている札が戻り次第、『B・B運輸』は敵ではなくなる。

「参謀、ターゲットが一人、人通りの少ない方へ入ったとの連絡が」
「了解しました。尾行を続けてください。感づかれたら即座に撤退するように、再度、全員に言っておいてください」

「了解」

トールキンは懷からタバコを取り出し、一本銜えた。ライターで火をつけようとしたとき、横から銜えていたタバコを取られた。

野球のバットケースを肩にかけている女性が、手の平でタバコを握りつぶす。

「ウチの近くでタバコは吸わない約束ツスよ、参謀」

「すみません、アクセル。どうも、禁煙のために最近吸ってないせいか、吸いたい衝動が出てきました」

申し訳なさそうに頭を掻くトールキン。アクセル（勿論、偽名である）と呼ばれた女性は呆れたように溜息を吐く。

「禁煙を決意したのなら、最後まで我慢して禁煙すべきツス。子どもを授かるかもしれないツスから」

「……どうして知っているんですか。まだ、誰にも言ってないのに」

トールキンは珍しく、驚きの表情を見せた。

アクセルは、軽く肩を竦めた。

「写真がたまたま見えただけッス。おなかが少し膨らんだ女性の」

「おめでとうございます、参謀」

通信係を務めている男性が、笑みを浮かべてお辞儀をした。

トールキンは今更になって少し気恥ずかしくなり、再び頭を掻く。

「まさかこんな仕事をしてる私が子どもを授かるとは思っても見ませんでした、五ヶ月に」

「お名前はもう決めてあるんですか？」

「いいえ。実は、まだなんです。妻から、私が考えるように言われたのですが、中々どうして。こういうのはどうも苦手で、催促されます」

苦笑いを浮かべる顔は、まさに父親の浮かべるそれと同じだった。

「いいんツスカ？ 五ヶ月も名前決めかねてて」

「妻に昨日怒られましたよ」

「素直な気持ちでいいんじゃないツスカ？ こう育って欲しい、って思いを名前にすれば」

「そうですね。シンプルでいいですね」

そう言って、トルキンは少し、考えるようにアゴに手を当てる。

「……難しいですね。私の頭はどうやら、この手のことが苦手なようです」

そう言って三人して苦笑いを浮かべた。

PDAからアラームが鳴った。不快な機械音を止め、PDAを見た。自分達のすぐ近くに一人、被検体が居た。

「上ツス」

そう言われてトルキンが上に視線を向けようとしたまさにその瞬間、三階建てのボロい建物の二階から、人影が飛び降りてきた。手には、金属製のパイプ。

「ハアアアアアアアアッ！！！」

落下速度が加わった一撃は、トルキンの脳天目掛けて振り下ろされる。

しかし、その攻撃が頭を力チ割る寸前、下から来たたたきらめきが鉄パイプを半分に切断し、少年の両足が地面につく前に、少年の体が吹き飛んだ。上に舞い上がった鉄パイプの半分が地面に落ちる。壁に勢いよくぶつかったことで止まった少年が、自分は彼女が持っているあの棒のようなもので殴られたのだと認識したときには既に、アローは構えていた。棒——鞘に鋼色の長く薄い刃を収め、腰の部分に体の正中線と鍔が平行になるよう刀を構えた。

それは、知っている人間が見れば、一見して『居合い切り』の構えだとわかったはずだ。だが、少年は、その構えを知らなかった。相手がどんな動きをするのか、手元に残った鉄パイプを投げつけることで伺おうとしたが、アクセルは刀を抜かず、鞘に収めたまま、鉄パイプを払った。これでは動きが読めない。

少年は撤退を考えた。相手は銃を持っている。奇襲で一撃で決められなかった。逃げなければやられる。

だが、その考えはすぐに消えた。

距離が開いた今、三人とも銃を抜かなかったからだ。理由は定かではないが、この好機に銃を抜かないのは、抜けない理由があるからだ、と考えた。

それに三対一と数では劣るものの、構えをしたまま動かない女性の後ろに控えている男性二人は、身構えもせずに二人の戦いを見物していた。それを、戦いは不得手と見た少年は、近くに転がっていた空ビンに壁に叩きつけ割り、リーチこそは劣るものの、即席で武器を作り、走り出した。

一瞬でトップスピードに乗った少年は、右手に持ったビンでアクセルを突こうと腕を伸ばす。

少年は、脚の速さに自信があった。トップスピードにすぐ乗り、驚異的な速さで相手との間合いを詰め、奇襲を用いたインファイトを得意としていた。奇襲で一撃にしとめることは出来なかったが、相手が近接格闘でしか戦わないと言っているのであれば、そこは自分の十八番。負けるはずが無いと踏んだ。

だが、少年の目論見は失敗した。彼女の持っている武器の間合いは、始めの一合で計れていた。刃の速度も。見切った――はずだった。

少年には、目の前で光が走った様にしか見えなかった。その瞬間には既に、ガラスは砕けていた。

パチン、と鞘の鯉口と鰐が軽くぶつかる音が、静かに響いた。

その時間が止まってしまったのかと錯覚してしまう間のすぐ後、切れ込みを入れたホースに勢いよく水を流したように、少年の右腕から激しく血液が噴出した。親指の付け根から腕の中腹までを二枚に切られた。

直後、少年の絶叫がこだました。

少年は選択を間違えた。あるとき逃げておけばよかったのだ。最終的にどうであれ、ここでこうなることは無かった。

そして、知っておくべきだった。『居合い抜き』を。そうすれば、『居合い抜き』が本領を発揮するのが、横に薙ぐときだと知ることができた。

紫電一閃の抜刀術を披露したアクセルは、鞘に収めた刀を肩に担いだ後、地面に落ちている野球のバットケースを拾って刀を中にしまった。

「これで、一人捕獲ッス」

「ご苦労様です。では、この調子で彼女の捕獲を頼みますよ、アク

セル」

ポケットから携帯を取り出したトールキンは、失血死寸前の少年のことなんて気にせず、回収班をまわすように言った。

「楽しみツスね。まさかあの悪名高い『ファントム亡霊』とやれるなんて」

刀と共に自分の身を抱き震わせる。

「あゝあっ！ ゾクゾクするツス」

その手首には、ロケットのついた鎖が捲かれていた。

1 - 1 2 (前書き)

こんちゃ〜♪ 水屋の娘は美しいと思ってる作者だよ〜♪

いや、参った参った。公立高校で麻雀部作ろうって友人が言うもんだから、おじさん、一肌脱いじやったよ。

何をしたかって？ そりゃあ勿論、校長に四時間にわたり麻雀のすばらしさを説いたのさ（フツ

まあ、作者の心境報告なんて活動報告枠でやれってことで 第十二話、はじまるジエ！

「お待たせえ〜」

エムと咲が服を買いに行っている間、コーヒーショップで買ったカフェオレを飲んでいると、買い物を終えた咲がランラン笑顔を俺に向けながらスキップして戻ってきた。咲、だけが。

「……エムは？」

「エムエムは——あれ？ さっきまで一緒に居たのに。どこ行ったんだろうね〜？」

「置いてきたのか……」

「たぶん……」

呆れた。

こいつ、一体何しにいったんだか。

……買い物は済ませたんだよ、な？

不安になってきた。

「ところで咲」

「ん？」

「エムはどんな服を買ったんだ？」

ムフフ、と口元に手を当て咲は笑みを浮かべる。

「気になる？ 気になるよね。気にならないわけないよね。エムエム、元がいいから、お洒落したらもっと可愛くなるもんね。」

「いや、アンタの意見は聞いてないから。どんな服を買ったんだ？」

「でも、残念。見てからのお楽しみなのだ。」

……これ、怒っていいよな？

ならなんで一緒じゃなかったんだって、怒っていいよな？

「さて、エムエムはどこかな。」

俺が怒る前に咲はエムの搜索を始めた。

咲のヤツ、逃げたな。

「おっ、みーっけ！」

程なくして、エムは見つかった。

エムの格好は、ハイネックの栗色アンダーウェアの上に、フェイクファーがフードについたブラウンのショートダッフルを着て、チエック柄のパンツと大分動きやすそうな格好に変わっていた。どうやら、咲が選んだものを早速着ているらしい。いや、もしかしたら、咲に着せられているのかもしれないが。

エムは、咲に背中を押されるようにして俺の前に来た。

「どう？ 似合ってるでしょ？」

「ああ、似合ってる。咲に任せて正解だった」

エムは、左手に持っていた少し大きめの袋を俺の前に突き出した。恐らく中には、エムに貸していたB・Bのコートが入っているのだろう。

俺はそれを受け取り、エムがもう一つ、これと同じぐらいのサイズの袋を持っていることに気が付いた。恐らく、そっちは拘束服が入っているのだろう。

「それ、中に入ってるのは拘束服か？」

「ああ。それがどうした」

「処分しておいてやろうか？」

「……助かる」

エムは一瞬躊躇ったが、俺にその袋を渡してくれた。

少し、以外だった。

こつもあつさりと渡してくれたことに。

少しは信頼してくれている——と言うことだろうか？

「どうした？」

「いや、なんでもない。——ん？ アンタ、そんなのしてたか？」

カフェオレを飲んでいると、エムの胸元を飾る……ロザリオ、だったか？ それが見えた。

俺がそれを聞くと、エムは露骨に顔を顰める。

「こいつが一緒に買え買え五月蠅かったんだ」

「え、いいじゃん、ペアルック」

そう言う咲の方を見たとき、咲も俺が彼女を見たことに気が付き、同じく胸元を飾っていたロザリオを俺に見せてきた。

なるほど。そう言うことが。

エムが顔を顰めるのもなんとなくわかった。

ペアルック……ねえ。

「おい、咲」

「ん？」

「アンタ、俺がエムのために渡した金で、ちゃっかり自分の分も買ってたんじゃないよ」

「いやあ、二つ買えば安くなるって言われて、つい」

つい、って……。まあ、いいか。クリスマスプレゼントの代わりとして消費したことにしておこう。どの道、何かしら渡すつもりではあったから、手間が省けてこちらとしては好都合だ。

「で、これからどうする？」

「戻ってロケット搜索」

モールを後にし、人の多い通りに出ると、早速フードを被ってしまったエムが即答する。

「えゝ、もう帰るのー？ もう少し遊んでから帰ろつよ」

「私はお前と違って暇じゃないんだ。今日だって本当なら、こんな場所に来る予定ではなかったんだ。もうお前の茶番に付き合ってる暇は無い」

「そんなこと言っちゃってー。エムエムだって、だゝいぶ楽しそうだったけど？」

「そうなのか？」

「うん。それはもう。どこにでも居る女の子みたいに――」

と、そこまで言ったところで、エムが咲の後ろに回りこみ、後頭部に手刀を振り下ろした。

「いったー！ えつ、ちょー！？ いったゝー！？ なんで叩くの！！」

「余計な事は言わなくていい」

「余計な事じゃないよ、ホントの事だよ！ エムエム、服の前であ
れでもない、これでもないって言ってたんだよ」

「そんなこと言ってない」

「百歩譲って言ってなかったとしても、悩んでたじゃん。すつごく。
だから、アドバイスして上げたのに」

そんなものは知らん、見たいな顔をしてエムが少し前に出た。

この二人、仲がいいのか悪いのか、よくわからないな。

「思ったんだが、咲」

「ん？」

「アンタ、エムに随分なついてないか？」

「そう？ いつも通りな気がするけど。抱きついて、おっぱい揉ん
で、耳にふく。うん。いつも通り」

まあ、いつも通りと言えばいつも通りだが。

いつも以上に絡み方が過激な気がする。

「あつ！ もしかして臍。エムエムにちょっとジェラシ？ 咲ち
ゃんがエムエムにばかりかまけて、自分に構ってくれないな」

て」

「それは無いから、絶対に」

「素直じゃないなー、臆は。言ってくれば、ながーい夜に一緒に寝てあげてもいいんだよ？　ん？」

……………。

不覚にも、一瞬、悩んでしまった。

異性に対してこんなことを思ってしまう俺も、そろそろそう言う年頃だということだろう。

と言うか！

全く、俺もヤキが回ったなッ！　自分で拾った子どもに欲情するなんて！

「……遠慮しておく。俺がそれを頼んだ瞬間、色々と終わりの気がする。しかもバッドエンドで」

「咲ちゃん的にはサイコなグッドエンドなんだけどなー」

「アンタにとってはな」

——ん？

「おい、咲。エムはどこ行った？」

「どっつて……あれ？　どこだろ？」

■ ■ ■

エムは、人ごみを獣のように疾駆していた。フードが脱げて顔が露になることも気にせず、肩や腕がぶつかり、背中に罵声を浴びせられることも気にもとめず、目の前を同じように——いや、エム以上の速さで人と人との間を縫うように走る彼女を追う。

自分が地を蹴り走る獣なら、目の前の彼女は、氷の上を軽やかに滑るアイススケーターだ。まるで無駄が無い。

一向に追いつけず、距離ばかりが開くことに苛立つ。それがあの女の笑みと重なり、苛立ちが憤りに変わった。

今の時代珍しく、刀の^{ナイフ}みを使うソード・アクセルと呼ばれている彼女の笑みを、忘れたことは無い。あのサディストの、醜悪な笑み。皮肉なものだ。エムとサディスト。

「——待てッ！」

いつまで走っても追いつかない苛立ちから声を出して静止を呼び

かけるも、相手は少し後ろを振り返り口元に笑みを浮かべるだけだった。

半ば目の前の人を押しつけるようにしながら走っていると、前を走っていたアクセルが消えた。

取り合えず見失ったところで止まる。周囲を見渡した。

「見つけた——！」

彼女は、まるで自分を嘲る様に晒いながら、裏路地の入り口前で立っていた。明らかな誘い。ここまであからさま過ぎるといっそ清しくすら思う。

エムは少し迷った。その誘いに乗ってやるかどうか。どう考えても向こうが圧倒的有利。これが罠と言う可能性も十二分にあるし、何より、自分は武器を一切持っていない。

向こうは相変わらず、肩に野球のバットケースをかけていた。あの中に何が入っているかは勿論知っている。

刀だ。銘は『菖蒲』^{あやめ}。無論銘は、人を“殺める”から取った銘——らしい。

互いの視線が交わる。相変わらず何を考えているか全く読めない、伽藍とした目。

その目に煌々と光が宿った。

「——！？」

ゆつくりと持ち上げられた手。その手首に捲かれているものを見て、エムは胸がつまった。見間違いじゃ、なかった。

見せ付けるように、見せびらかすように、ひけらかすように。あるいは、見る、と云わんばかりに彼女は、手首にロケットを捲いていた。

その瞬間、エムは再び、足を動かした。沸々と湧き上がった怒りが深淵から漏れ出し、それをガソリンに脚が動いた。

なぜアイツがあれを持っている。なぜ？ そんな疑問が頭の隅を掠めるが、なに、どうと言うことは無い。彼女は、実行部隊>狩人<の人間だ。大方、自分を探しているときに拾われたのだろう。

もっとも可能性の高い結論を頭で出すと同時に、エムは路地裏へと脚を踏み入れた。三叉路の中央で、彼女は止まった。

「久しぶりツスね、？ 11。随分と探したツスよ。失敬、今はエムとか名のつてたツスね。お似合いツスよ、とつても」

「……そんなことはどうでもいい。それを返せ」

エムの刺すような眼光を気にしたふうも無く、アクセルは手首に捲いてあるロケットを再び、エムに見せびらかすように吊り上げる。

「これツスか？ いやツスよ。これは、ウチが拾ったんツスから。返して欲しければ、力づくで奪ってみたらどうツスか？」

そう言って、エムに向かって自分の尻を叩いてみせる。なめてい

るにもほどがある。

しかし、今、この状態で彼女を殴ろうと踏み込めば、上半身と下半身が泣き別れるのは、火を見るより明らかだった。

彼女は、まだ、刀を構えては居ない。袋から出してすら居ない。だが、袋から刀を取り出して構え、そしてその後の抜刀に至るまでの彼女の動作は、恐ろしく無駄が無いことを、エムは知っている。この間合いでは、微妙に向こうの方が早い。

加えて彼女には、遠距離武器がきかない。

今、試しに足元に転がっていた石ころを投げる。

「ほいっと！」

肩にかけてあったバットケースを取り、フルスイングで石を打つ。カッン、と小気味のいい音を鳴らし、石はエムの横を通り過ぎた。この程度では、あれを使う必要もないということか。

「茶番ツスね。お得意の銃はどうしたツスか？」

「……………」

エムは苦虫を噛み潰したような顔をした。

「ああ、そう言えば、部下の死体回収のときに転がってたツスね。あんさんの指紋がたっぷりついた銃」

その答えに、エムはさらに顔を歪める。わかっただけで聞いたその

白々しさは、兎に角、エムの神経を逆撫でした。

「にしても可愛そうツスよね。あんさんの口車に乗せられて脱走した少女たち」

アクセルはゆっくりと刀を取り出す。

「大人しくしていれば、別に悪いようにするつもりは無かったんツスけど。まあ、あんさんの話術がウチらの枷を凌駕したただけなんスけど。それにしても、よくまあやってくれやりましたツスね。あれで計画が一年ほど先延ばしになったじゃないツスカ」

ざまあ見ろ、とエムは内心ほくそ笑んだ。

「しかし、まあ、その誤算も残す所、あんさんだけなんツスけど」

それは、つまり、

「私以外、全員——」

「安心していいツス。皆殺しにはしてないツスから。捕獲できるのは捕獲しろって命令が出たツスから、已む無く何人かは生け捕りにしたツス。だから、あんさんがここで大人しく投降するなら、ウチも得物を収めるツス」

暫し、エムがどのような反応に出るか待ったアクセルは、しかし何も動く気配のないエムを見て、溜息を吐きながら頭を掻く。

「勿論、返答はノーツスよね？ それでも一向に構わないツスよ。個人的には、あんさん刻んでみたいな〜と思ってたりしてたツスカ

ら、むしろ好都合ッス」

「……下種が」

「どうとでもどうぞッス。ウチはこう言う性分スから。あんさんを殺すなり捕獲するなりすれば、清算も済む——とは一概には言えないッスけど、少しは出来るらしいんで、大人しく殺されてくれないッスか？」

上等な漆塗りの鞘から刀を抜く。刃は夜露に塗れたように妖々とした輝きを放つ。

「……断る」

「結構ッス、その答えだけで。さうと、行くッスよ？ 11。覚悟の程は十分ッスか？」

答えを聞く前に、鞘をエムに向かって投げ放った。縦回転を加えられた鞘をかわすとすぐ、その一秒の間も無い一瞬で間合いを詰めたアクセルの乱撃が襲ってきた。

突き、唐竹、刀を返して逆風、袈裟切り、左薙ぎ。

激流の如き勢いで次々と切りつけてくる。かわすたびにエムの体に傷がついた。

新しく買った服に、刀傷と血の痕が出来てゆく。

「どうしたッスか？ 随分と動きが鈍いッスね」

余裕の笑みを浮かべながらただ坦々と攻撃を続けるアクセル。エムはさっきの鞘を強引にでも受け止めて、武器にすればよかったと今更ながら後悔する。

首を一閃する横なぎを、膝を屈伸することでかわす。そのままエムは、膝を伸ばす勢いを活かし、アクセルに体当たりを仕掛けた。だが、アクセルも、さっきの隙がわざとだと言いたげに、難なく後ろに避ける。引き際に放った左薙ぎの剣先が、エムの右腕を切りつけた。

アクセルは、攻撃を避けるために今更後ろに引いたエムを追わず、逆に今度は自分が数歩、エムから距離を開けた。

「なんか、拍子抜けッス」

刀を肩に置いたアクセルが、心底退屈そうに言った。

そのまま欠伸までされる始末に、エムは屈辱的だった。

「なんか、一方的過ぎてつまらないッスね。弱いもの苛めをしてるみたいで、なんか罪悪感を感じるッス」

「……………」

「ああ、そーだ」

アクセルは、悪戯を思いついた子どものような無邪気な笑みを浮かべた。

不意にアクセルは刀を小脇に挟み、手首に捲いてあったロケット

を外し、エムに見せびらかす。

「?11。確かこれは、大事なものらしいツスね?」

アクセルは、悪事を働こうとする悪人のような醜悪な笑みを浮かべた。

その笑みに、エムは鳥肌が立った。目の前の女が、一体何をするか、予想できた。

「や、やめろ……」

動揺した。声が少し上ずった。アクセルがそれに手ごたえを感じ、さらに笑みを深めた。

「お前、そんなことしてみろ。殺すぞ!」

「おおお? 防戦一方だったお嬢ちゃんの台詞とは思えない、大仰な態度ツスね。いいんスか? そんな命令口調で。これ、両断しちやうツスよ?」

小脇に挟んでいた刀を握りなおし、反対の手で持ったロケットを剣先で突く。

ロケットを取り戻すために走り出そうとして前に出ようとした脚を、エムの屈強な自制心が止めた。これは、誘いだ。明らかじゃないか。アイツの常套手段。相手の神経を逆撫ですることをして、相手の動きを誘導する。

だから、落ち着け。今はダメだ。もっと大きな隙を作ってからで

なければ、仮に取り戻せたとしてもやられる。

自身を落ち着けるために自分に言い聞かせているエム。アクセルは、その精神状態が手に取るようにわかった。それはもう面白いように。

だから、さらに深く、満面に、醜悪な笑みを浮かべて、言った。

「取りにこないッスか？ そうッスか。てことは、これはもう——
必要ないッスね」

「……ッ！ やめ——」

アクセルはエムの不意を付いてロケットを上に取り投げた。そして、大上段に刀を構える。

エムの自制心は限界を向かえ地面を蹴った。

だが、間に合わない。警戒をするあまり距離を開けすぎた。それに加えアクセルも、エムから距離を取っていた。——優勢であるにもかかわらず。

エムは悟った。初めからこの形にするために、こいつはわざと距離を開けたのだと。

「エムエム下がって！」

声が聞こえた。その直後、エムの頭の上を鶉の卵ほどの影が二つ、通過した。アクセルは急遽、刀の軌道を変える。左肩を狙った一個を叩き切り、もう一個を体をひねる事でかわす。透き通った金属音

を響かせ、ロケットが地面に落ちる。

「天から美少女、とうじょ〜う!」

咲がエムの頭上を越え、変なポーズを決めて二人の間に着地した。エムは人生で初めて、立っている状態で、頭の上を飛び越えられた。

「……………」

「……………」

「えっ、ちょ! 二人して無反応ですか!?!」

咲のポーズとセリフに、二人の反応はきわめてドライである。

「あんさんの知り合いッスか?」

「いや、私はこんなヤツ知らない」

「イヤだな〜、エムエム。咲ちゃんとエムエムの仲じゃないか。そんな冷たいこと言わないでくれよ。——って! 服がボロボロじゃん! しかも傷だらけ! どうしたの!?!」

そう言って傷の容態を見ようと手を伸ばすが、エムはその手を払う。

「一体何しに来た」

「何って、エムエムを追いに来たに決まってるじゃない。それよりも、大丈夫?」

「この程度、問題ない。それよりも退け。邪魔だ」

エムは咲を押しつける。咲は、横を通り抜けようとしたエムの腕を掴んだ。

「……離せ」

「はあ。ちょっとは落ち着きなよ、エムエム。正直、今のエムエムじゃあ、あの人には勝てないよ」

眉間にシワを寄せるエム。咲は気にすることなく、続けた。

「まず、素手なのに刀剣に挑むなんて無茶だよ。ローマ字読みで上から呼んでも下から読んでも名前が変わらない某作者が書いた小説内に登場する、某無刀にして無敵の剣法でも使えない限りやるのは無謀だよ」

「待て。無刀なのに剣法はおかしいだろ。剣法は刀を使ってこそその剣法だろうが」

「まあ、そこはあれだよ。その剣法は手刀、足刀を使うからね。ほら、刀を使ってる。早い話が言葉遊びだよ」

「いいのか、それで……」

エムは大きく肩を落とした。二人の漫才を見ていたアクセルが、欠伸をした。

「おーい、こっちは無視ッスか？ そろそろ切り込みたいんッス

けど」

「切り込む……ああ、なるへそ。やっぱり君だよ、エムエムをこんなボロボロにしたのは」

「随分とわかりきったことを聞くツスね。そうツスよ。それだったら、どうしたって言うツスか？」

「そりゃあ勿論、ぶん殴らせてもらうよ。——エムエムはね、私のお気に入りだからね」

そう言うや否や咲は構えた。両手で軽く拳を握り、右手を顔の前に、甲を相手に向けて左手を心臓の前に。左足を右足の少し後ろに、膝をやわらかく曲げる。

「素手で刀剣に挑むのは、無謀じゃなかったスカ？」

アクセルはその構えを見た後、足元に落ちたロケットを回収しながら言った。

「まあ、手甲が無いのは少し嫌だけど、うん、別に問題ないよ。君の刃は私には届かないから」

ふん、とアクセルは頷く。何かを噛み締めるように目蓋を閉じて、刀の峰で肩を軽く叩く。

「名前、聞いていいツスカ？」

「私？ 私は、蒼鳥 咲。朧の正妻だよ」

咲のあまりにも緊張感の無い笑みにアクセルは、苦笑いを浮かべる。さっきまで戦っていたエムとあまりにも対極的性格で、調子が狂う。

だが、それでも、目の前の彼女が相当のやり手だと言う事は、名前を聞いた時点でわかった。

「そんじゃ、美少女らしく、ブアーツと戦いますかッ！」

1 - 13 (前書き)

はい……水屋の娘は美しいと思ってる作者でございます。

はい……お察しの通り、大分、ブルーでございます。はい……。

なぜこんなにブルーなのかというと、今回の話を書いてて気がかり
と言うか、思ったことと言うか、これって読者様を置いてきぼりに
するようなオリジナル設定じゃないか？ と思い、注釈やら補足説
明やらを加えたは良いですが、やっぱりこれって読者様置いてきぼ
りにしてるよな……と、そこから来る結果は評価ダウンと言うこと
で、それを思うとブルーにならざるを得ないと言いますか……。

はい、くだいですね。

まあ、取り合えず、戦闘あり！ フラグあり！ 咲の素性とチート
能力の片鱗が明らかになる、第13話です。

どうぞ……。

その光景を見た人間はまず、あの二人が本当に人間なのかと、先に居たギャラリーに聞いただろう。

咲の手から打ち放たれた礫が、アクセルの刀の薙ぎ払いで打ち碎かれる。礫と刃がぶつかり一瞬、火花が散る。破片がアクセルの頬を傷つけた。

その直後、咲は足場になっていた建物の壁を蹴り、空中で半回転して反対側の建物の壁に着地し、再び礫を放った。

エムは、目を見開きっぱなしだった。二人——特に咲の異常を通り越して魔的とすら思える身のこなしに。

対するアクセルは、始めこそ咲の三次元の動きに驚いていたが、今では完璧な応戦を繰り返している。

開始早々、咲は、アクセルに突貫した。その勢いを活かした渾身の右ストレートをアクセルの顔面に叩き込もうとするが、咲の異常な加速力に面食らって一瞬動きが遅れたアクセルはそれでもカウンターを合わせようと、刀を突き出した。寸分の狂いも無く拳の中心に切っ先を向けた。

咲はその切っ先の横へ急遽、拳を滑らせた。そのまま甲で刀身を払い、さらに一歩踏み込んで、今度は左の肘打ちを打ち込む。結果、相手の右胸部に決まった。

だが、アクセルは勢いをつけてぶつけられた鉄球の如き一撃を受

け呼吸が一瞬止まりながらも、咲へ逆袈裟を放つ。結果、咲の右肩から左脇腹までを両断するかと思われた一閃は、咲の肩口に触れることなく、そこに見えない川の激流があるように、弾かれた。またとないチャンスが咲に訪れた。

外しようもない距離で、アクセルを踏み込んだダンプカー並みの右拳がアクセル（人名）の腹部を直撃した。

咲は右手に確かな感触を覚える。これで勝負が決まったと思った。

つい熱くなってしまった。一連の動作を若干とは言え、エムが傷つけられることで頭に血が上って居た状態で終えた咲は、拳を叩き込んでから後悔する。後の祭りであることは百も承知だが、寸での所で威力を落とすことは出来たため、相手の上半身が五臓六腑と骨を撒き散らしながらぶっ飛ぶことは無かったが、それでも、確実に殺してしまったことには違いない。

B・Bの教えに従い、一撃を決めた相手からすぐに距離を取ろうと後ろへ跳ぶ。

その途中、『ヤバイ』と言う感じが咲の全身を駆け巡り、脳が四肢に『後ろに早く跳べ！』と命じた。アクセルを押し飛ばすようにして後ろに跳んですぐ、鼻先を剣先が掠めた。あと一瞬遅ければ、頭蓋を斜め半分に切り落とされていた。

久しぶりに味わった命の危険に冗談抜きで荒い息を整えながら、人間一人を戦闘不能にするには過剰すぎる、咲の五割強の出力を乗せた拳が鳩尾を穿ったはずの、刀を杖のように地面に立て腹をさすっているアクセルを見た。

なぜ？ 咲は油断せずに、大上段に刀を改めて構えたアクセルを見据える。なぜ、あの一撃をモロに受けて、立ってられる。いくつもの仮説と否定が頭の中をめぐる。そして、一つの過程にたどり着いた。

インフィニット・ストラトス——と言う兵器がある。世間体で言えば、あれはパワード・スーツと言うことになっているが、あれは列記とした兵器だ。戦闘機よりも速く、軍隊一個師団並みの火力をそれ一機でまかなえるのだ。これを兵器といわずして何という。

今から約十年前、篠ノ之束と言う女性が世間に発表したIS。人類が、ISを『IS』として認知したのは、その一カ月後に起こった“白騎士事件”以降だ。

詳しい説明は端折らせてもらう。ただ、重要な事を一つ。その兵器の登場によって、世界のバランスが大きく崩れたと言うことだ。

良くも、悪くも。

男も、女も。

科学者も、軍人も。

正直、そんな代物を持っている組織が他にあるとは信じ難いが、相手はどうやら自分達のような人間が正攻法で手に入れられる代物ではないISを持っているらしかった。それなら、あの一撃で死ななかった理由も領けた。むしろそれでしか、説明できない。

蒼鳥 咲。四月に咲く桜のような桃色のショートヘア、好戦的な輝きを放つ瑠璃色の瞳、朧LOVEなただの女の子——なはずが無

く、彼女は、四肢に擬似重力装置と呼ばれる機械を備えている、全身義体だ。^{イボーク}
^{フロート}

咲はISの警戒のために、四肢に命じた。重力を歪める——と。

そんな激しい攻防を目の当たりにしたエムは、アクセルに隙があればそこを突こうと思っていたが、いまとなつてはそれが絶対に不可能であることを知った。丸腰であればなおさらだ。

実力差がありすぎるのだ。咲と自分だけではなく、アクセルと自分にも。あの剣戟が本気では無いことをエム自身悟っていたが、エムに放った剣戟と、これまで咲に放った剣戟とでは、速度が段違いだった。

指弾を打ち尽くした咲は、壁から足を離し、アクセルの頭上へ蹴りを落とした。アクセルはそれを無理せず前に転がることでかわす。咲の蹴りは舗装された通路を大きくへこませ、砂埃が咲の姿を隠した。

この辺一体は既に、一撃がちよつとした爆薬並みはあるのではないかと錯覚する咲の拳や蹴りで、至る所に穴や隕石が落ちた跡のような小型のクレーターが出来上がっていた。

「随分とかわすのが上手いねッ！」

アクセルと咲の間にある砂埃が擬似重力に押されて球体状に晴れ、咲はアクセルとの距離を重力を感じさせない走りで一気につめた。右ストレートがアクセルのこめかみを掠めた。

「それは、どうも——ッス——！」

咲の拳の隙を縫って刀を小振りに振る。

咲のがら空きになった脇腹に刃が襲う。

しかし、その刃は、止まった。そこにアクセルの意思はない。まるで見えない流れでもあるかのように、刀が何かに受け止められ、押し返されている——そんな感触をアクセルは感じた。

咲は下から上にアッパーカットを放つ。アクセルは刀を片手持ちに变え、アゴに掌打を打たれる寸前でそれを止めた。

「どんな手品を使ってるツスカ？ 壁に垂直で立ったり、礫で道路に穴開けたり、刀に触れずに剣戟を止めたり。冥土の土産に教えてくれないツスカ？」

互いの息づかいすら聞こえそうなか、咲は自分の拳を受け止めたアクセルに驚き、アクセルは咲の奇想天外、空前絶後の動きをやつと止められたことに安堵する。

「冥土の土産に教えてあげる——なんて死亡フラグを口実に、そんな大事な事、言うと思ってるの？」

「まあ、ムリッスよね。ウチも、冥土の土産は土産でも、メイドの土産の方が好きッス」

「同感……！」

二人は同時に、互いの腹部を足の裏で押すように蹴った。互いの距離が開く。

「あんさん、本当に人間ツスカあ？」

咲に蹴られた勢いが死んだ後、自ら数歩引き下がったアクセルは、肩に刀を担いで聞いた。

「違うよ。人工人間だよ」

「……サイコ。ショッカーツスカ。どうりでそんな愉快な動きが出るわけツス」

「そう言う君も、随分とおかしな刀を持ってるね。あれだけの礫を弾いておきながら刃こぼれ一つしてない。誰に打ってもらったの？」

「言ってもどうせわからないツスよ」

まるで緊張感の無い二人の会話。これまでの一部始終を見ていた人間には、その違和感に嵐の前の静けさを感じずにはいられない。エムもまた然り。

そんな中、無粋にも、その静けさに機械音が介入した。アクセルはポケットからPDAを取り出す。

溜息を漏らしながらPDAをしまうアクセルに、咲は、

「もう帰っちゃうの？」

「残念ツスけど、そうみたいツス。いやあ、ホント、残念ツス。これから本気を出すつもりだったツスけど」

「それ、負けてる人間のセリフ」

「どうしても言ってくれッス。現にウチは、あと一枚、切り札を残してるッスから」

「そう。でも残念。私はあと二枚も切り札があるの」

エムは直感的に悟った。これは絶対に見栄だと。

それに反し、アクセルは豪快に笑った。

「それは本当に残念ッス。どっちの切り札の方が強いのか、近いうちにぶつけてみたいッスね」

さて、とアクセルは言って、地面に転がっていたバットケースを拾った。

「鞘は、預けておくッス。これを返して欲しければ、ちゃんととっておくッスよ。じゃあ、バイ」

アクセルは一度手を振ると、跳んだ。それも、建物三階屋上まで。予備動作は無い。

エムは、その光景を目の当たりにして、再び実力の差を思い知らされる。

ただ、咲だけは、いつものへらへらした笑みを振り払い、真剣な眼差しでそれを見ていた。

「うはあゝ、随分と化け物じみた跳躍力だなー。一体何食べたらあ

んなふうに跳べるのかね？」

片手に鞘を持っていつの間にか立っていた朧は、その姿をボケーと見ながら暢気にそんな事を言った。

「あゝ、朧！ いままで何処に居たのー？ 咲ちゃん一人であの人相手にするの意外と疲れたゝ」

「アホ。俺みたいない一般人をアンタらみたいないびつくり人間の万国ビックリショーに巻き込むな。やるんだったら俺が安全な場所に居るところでやれ」

「えゝ、ひどーい！ ビックリ人間って言ったら、咲ちゃんよりも朧の方でしょ、どう考えたってゝ」

咲は不満がたまった頬を膨らませながら、朧に文句を言う。朧は鞘を肩に担いで、咲の“迷言”をはいはいと流す。

「で、あの刃物ぶん回してた女性が持ってたあれが、エムの探していたロケットか？」

「……そうだ。全く、最悪な女に拾われた」

「それで追わないのか？」

エムが苦虫を噛み潰したような顔をする。

「追っても……私では、あれには勝てない。絶対に」

「へえ、以外だな。アンタがそうやって正直に自分が格下ってこと

を認めるなんて」

あんな化け物同士のデスマッチを見てしまえば、プライドがどうだのと言っている場合ではない。

遠くからパトカーのサイレンが聞こえて来た。どうやらこの騒ぎを聞きつけた人間が通報したらしい。

「……警察か。じゃあ移動するぞ。こんな所で立ってたら、補導されて何聞かれるかわかったものじゃない」

そう言っただけは歩き出そうとしたが、ふと何かを思い出したように立ち止まり、おもむろに持っていた袋からB・Bのコートを取り出した。

「ほら、着ておけ。その格好は目に付くからな。傷は……まあ、問題ないか」

エムは自分の格好に目を落とす。ついさっき咲と一緒に買った服は、刃物で鋭く斬られた跡と、血で汚れてしまっていた。少し、気分が沈む。

臙から渡された、エムには少し大きめのコートを着る。コートの前を閉めると切り口が殆ど覆われて外からは見えなくなった。

事務所への帰宅途中、咲が戦闘での疲労を理由に臙の背中に飛び乗った。珍しく、臙はそんな咲を邪険にはしなかった。ニタニタと笑う咲を見て鬱陶しそうに溜息を吐いてはいたが。

臙は拘束服が入っている袋を通した鞘を咲の尻の下にあてがって

歩いた。

その隣を歩いていたエムは、少しうとうとし始めた咲を見て、眠られる前に聞こうと思っていたことを尋ねた。

「おい、お前」

「ん？ わたしい？」

一人称が“わたし”に変わった咲のろんとした目がエムをゆっくりとみた。

「ああ、それ以外に誰が居る。まあいい。それよりも、さっきのあれは何だ。壁に垂直で立ったり、礫にしたって、あの速度は異常だ。お前、一体何者なんだ」

咲はエムの質問にどう答えるべきかと、頬を臙のうなじ辺りにつけてうーん、と唸った。

「ねえ、臙……」

「アンタに任せる。エムが聞きたがってることは俺じゃなくて、アンタに直接関わることだからな」

「そう、だね」

臙の胸の前で腕を交差するように前に突き出していた咲の手が、ゆっくりと、優しく、ぬくもりを求めるように、臙の肩の上に乗る。

咲は少し目を瞑り昔のことを思い出すようにした後、目を開けて

咲が口を開くのを待っていたエムを見た。

「エムは、インフニス・ストラトスISって知ってる？」

「ああ」

「じゃあ、ISが当初は何に使われようとしてたか知ってる？」

「宇宙進出のために開発が進んでいたと聞く。それがどうした。お前に何か関係があるのか？」

「うん、とっても。じゃあ、次の質問。“ISSP”って、知ってる？」

「アイ・エス・エス・レイISSP？ いや、知らん」

「インフイニットInfinitesimal ストラトスStratos スペースSpace プランPlanの略なんだあ、ISSPって。」

ISでまだ宇宙進出を考えてたときの話だから、もう九年ぐらい前になるのかな？ そう言う計画があつて、それで、その計画の研究機関をそのままISSP機関って言うんだけど、研究室は01から03まであつたの。IS委員会直轄の研究機関。すごいでしょ？」

三力国合同IS宇宙技術研究機関——ISSP。順番に、アメリカ、ロシア、日本の三力国に、研究室はあつた。

ちなみに、発案国はロシアだ。ISが出来てからの日本をアメリカが何かといちゃもん(?)を付けては、やれ学園を作れたの、やれ運営費は日本で持てだの言っていたため、そんな日本があまりに

も不憫で不憫で仕方が無くなり、『まあまずは、一つの目標に向かつて互いに手を取り合って団結力を高めましょう。それで、アラスカ条約を守る番人を我々で勤めようじゃないですか』と言う、傍から見ればいじめっ子といじめられっ子の仲裁役になり、その後、その二人と共に三銃士を目指すと言う、ウマウマな立場を獲得したロシアだが、無論、裏では、ISを作り出した天才が居る国・日本へ恩を売るためだ。（売れたのかどうかは別として）

IS委員会直轄なのに三カ国だけ？ なにかおかしくないか？と咲の言動に疑問に思った方も居るだろう。確かに、咲の言っていた『IS委員会直轄のISSP』と言うモノはある。だがその場合のISSPの略は、ISを取り締まる警察を意味する、インフラニットストラトスセキュリティポリス（インフラニットストラトスセキュリティポリス）の略となる。咲の勉強不足が伺える。

これもこれで大分不平等と言うか、乱暴と言うか、思うところが無いでもないが、ロシアの煽てに調子をよくした某A国の圧力と言うのも無きにしも非ずだったので、仕方が無いと言えば仕方が無い。

ロシアの思惑通り（？）、今までアラスカ条約を破った国が無いのは、ある意味での収穫と言える。ちなみに、なぜ発案国のロシアが02かと言うとお察しの通りである。

「その当時は、まだ“アラスカ条約”が出来たばかりで、色々な意味でちょっとした冷戦状態。条約がなじみ始めてからやっと国は本格的に宇宙開発に手をつけるの。ここまでは、理解した？」

「ああ、理解した。続けてくれ」

「三つある内のISSP研究機関なんだけど、一番すごかったのは

ロシアのISSP-02研究室。今は普通に回ってるけど、ナノマシンを医療技術に使えるまで発展させたのも02研究室。

その後も、その研究室はどんどんすごい発明をしてつたの。その一つが、宇宙空間での作業効率を上げるために開発された――擬^{ロト}似重力。

ISは個数が限られてるでしょ？ 研究所長は、それではいつか労働力が足りなくなると考えて、擬^{ロト}似重力を作つたの。私には、それが移植されてる」

「なるほど、擬似重力か。だから壁に垂直で立てたのか。……だが、待て。なぜ人の体に埋め込んだんだ。宇宙では宇宙服を着るのだから宇宙服につけた方がよかつたんじゃないか？」

「そう……だね。そっちの方が手間が少なくて効率的だね。でも、そのときの研究所長は、生身の肉体に埋め込むことを選んだの。なぜだかわかる？」

エムは静かに首を横に振つた。

「理由はとっても簡単。良質な研究成果を国に提出するため。それだけ。体内の擬^{ロト}似重力発生装置と脳髓を繋げて、人間の脳で直接制御仕様としてたの。作成の実験過程で亡くなつた人は指が何本あつても足りない」

「ま、待て。話しが飛躍し過ぎてないか。端折りすぎだ。そもそも、なんでそんな危険な実験を国は続けさせた。理解できない」

臍が溜息を吐いた。

「咲、査定の話を忘れてるぞ」

「ああ、そうだった。ごめんごめん。でも、ごめん。もうムリ。私……もう………ねむい……」

そう言って咲は臃の背中に全体重を預けて意識を手放した。ちょっとやそつと揺すつてやっただけじゃあ起きそうも無い。

臃はまた溜息を吐いた。

「ごめんな、エム。この話の続きは、また今度にしてやってくれないか。擬似重力^{フロート}つて、長時間使うと疲れるらしいんだ」

「お前は、話の続きを知らないのか？」

臃はさつき、査定の話を忘れてるぞ、と言った。これは内容を知つてる証拠だと思い、エムは訊いてみた。

その問いに正直に答えるべきか悩んだ臃。この話は、咲自身のことだ。全部聞き知つていることとはいえ、“家族”の昔話を他人にしてもいいのだろうか？

結果、

「委員会に研究成果を提出する義務があつたんだ、ISSP研究機関は」

喋ることにした。今は自分の背中の上で静かに寝息を立てている咲は、エムに話した。つまりは、知つてもらつても構わない、教え

てしまっても構わないと判断したからだ。内容が同じならば誰が教えようとも変わらない。

「それで国がその提出された内容を読んで、実際に成果を目の当たりにして、一年毎の予算を決める、つまりは発表会だ。」

それまでの二年間、02研究室は成果無しだったからな。02研究室はトップを取るために死に物狂いで研究して、生身の体に埋め込んで使えるようにした。ここまではオーケーか？」

教壇に立つ教師が生徒に何かを教えているのような口調で臃はエムに言った。

「ああ。それで、その査定の結果は？」

「勿論、文句なしで一位さ。^{トップ}電子機器と脳髓を導線で繋いで、脳の信号で機械を操れることに成功したんだ。そんな機能がダントツで一位じゃないわけがないだろ？」

でも、内部告発——って言うのか？ 02研究室で働いていた研究員の一人が非人道的な人体実験をしていたことをお上^{トップ}に報告。真偽を調査した結果、その事実が発覚。その後は芋づる式に、それまでの研究成果が非人道的な実験の上で成り立っていることが判明。02研究機関は凍結。

当時の所長を含め、実験に関与してた人間は全員、逮捕。その後、02研究員達がどうなったかは、不明。なんで国がそんな実験を続けさせたかと言うと、無論、その研究が秘密裏に行われていたからだ」

実験——どんな実験が行われていたか、正直、エムには予想できなかった。出来なかったが、考えたくなかったが、考えるなと思えば思うほど勝手に、あそこでの出来事が思い起こされた。

精神をむさぼる音すら幻聴で聞こえそうな、劣悪な部屋。

ぴちゃ……ぴちゃ……ぴちゃ。

鼓膜に刻まれたしずくの音が、雨でもないのに聞こえた。

エムは知らず知らずのうちに震えた右腕を、左手で押さえつける。

——治まれ。

——治まれ。

と、強く念じながら。

「ならこいつは、その研究成果とやらの生き残りなのか？」

臃は難しそうな顔をしながら、他にもいた生き残り達が自分の腕の中で一人ずつ冷たくなっていった、あのときを思い出し、それを吐き出すような溜息を吐いた。

「まあ、そう言うところ。コイツはコイツで、結構ハードな人生を生きてるんだ」

人は見かけに寄らない、と言うが、まさにその通りだ。人生の歩みともなればなおさら。咲はその典型と言えるのかもしれない。

厳しいを通り越して厳酷。

惨いを通り過ぎて惨酷。

そんな人生をまだ二十年も生きていないように見える少女は経験し、どんな思いをしたのか、エムは少し知りたかった。ある種の同類として。

「うっ……」

人目につかない道と街道を出たり入ったりしながら事務所まであと数分のところまで来ると、臃が眉間にシワを寄せて何やら言葉に詰まった。臃は何度目になるかわからない溜息を吐いた。

「どうした？」

「咲のヨダレが首筋に……」

確かに、しまりの無い口の端からヨダレを垂らしていた。仕方ないと言って、臃はまた溜息を吐いた。

「今日は咲もがんばってくれかたら許してやるか……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4361v/>

IS = 誰がための銃痕 =

2011年11月15日19時44分発行